
Under the Sun

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Under the Sun

【Nコード】

N4945I

【作者名】

RAN

【あらすじ】

太陽の神の血をひく子孫である王と、聖女で治める国。

だが、次期国王の王子は無愛想で、庶民出の聖女は戸惑うばかり。様々な出会いを経て、二人は関係を深め、世界の真理に近づいていく。

サイト、dノベ転載

その人は怖い顔をしていた。それがまず、第一印象。何が、と言われるとわからないけれど、とにかく怖かった。背筋に寒気が走った。

きれいなのに、あまり丁寧に扱われていない短い黒髪。全てを見通そうとする澄んだ海の色。瞳。

その部分部分はきれいなのに、どうしても彼にはきれいだという気持ちがあわなかった。

むしろ、もつと粘っこい、執着にも似た情熱みたいなものを感じた。

だから怖かったのかもしれない。

しかも彼はこの国の第一王子だ。

太陽の神を崇める私達の国は、太陽の神の血を引くと言われる王族が支配していた。

そしてここは娼婦館である。

私は、記憶がある頃からここにいた。

私が赤ん坊の頃、この娼婦館の裏に捨てられていたのを拾われたらしい。

名前は、私が入っていた籠の中の紙切れに書いてあったらしい。

私は拾われたことを後悔なんかしていない。

ここの人達は優しいし、ひどい扱いをされたことがない。

楽な仕事ではないが、その日々は充実していた。

何より、毎日を不自由なく過ごせた。

だから私はここに拾われてよかった。

だが、やはり娼婦館はあまり表でできるような商売ではない。

この商売はただの享楽の時間を提供するだけで、生産性がないというのが一般的な見方だ。

あとは、倫理観に反する、とかいう理由のため。

というような場所なのだ、私のいる場所は。

だが、今そこにゆくゆくは国王になろうという人がいる。しかも目の前に。

次の仕事までと、控え室で休んでいた私はただ呆気に取られて、王子を見上げることしかできなかった。

他の皆も驚いてこちらを見ているのが、なんとなくわかった。

「貴方がユレイアですか」

冷たい青の瞳で私を見ていた王子が、口を開いた。

私は慌てて返事をした。

「は、はい！」

王子は肩膝をつき、私に視線を合わせた。

まるで値踏みするかのように、じろじろと上から下まで私を見る。正直、あまり気分のいいものではなかった。

言葉は丁寧だが、その態度は明らかに私を蔑んでいるのがわかった。

そうして、また王子はまた私の顔を見て、視線が合った。

「私はこの国の第一王子、カースライド。貴方はこの国の聖女に選ばれました。これから私と共に生活していただきたく、お迎えにあがりました」

そう言うと、王子 カースライドは私の手を取って、軽く口づけた。

私は、突然のことで頭が真っ白になり、動くことができなかった。

だが、カースライド王子はそんな私に構わず、手をすぐに離れた。

「貴方の準備が整い次第、城に連れていきたいと思えます。いつ、準備は整いますか」

カーズライドは次々に言葉を私に浴びせてくる。
ただただ驚いて動くことのできない私を見かねて、娼婦館を取り
仕切るNO・1のリクス姉さんが間に入ってくれた。

「いきなりそのようなことをおっしゃられましたも困ります。どう
いうことなのか、もったきちんと説明してはもらえませんか？
か？ だいたい、ここは娼婦の控え室です。王子ともあるう方のい
らっしゃるような所ではありません。別室にてお話を伺わせてくだ
さい」

「……………わかりました」

カーズライドは渋々といった様子で立ち上がる。

リクス姉さんも、私の手をひいて一緒に立ち上がった。

私は少し足をふらつかせながらも、姉さんの後ろについて立った。

そうしてリクス姉さんは、こちらです、と言ってカーズライドを
賓客室に案内した。

その部屋は、館長でもありNO・1娼婦でもある者がその職務を
する時に使用する部屋で、たまに重要な取引の場所にも使われる。

今まで座ったことのない柔らかい革張りのソファーに座り、私と
リクス姉さん、カーズライドは対峙した。

座った途端、カーズライドは姉さんを見据えて、話を切り出した。

「この国で、一人の王には必ず、国の安定をもたらすとされる聖女
がいる、ということは知っていますね。その聖女というのは、王家
のように代々の血筋によるものではありません。ある日全く規則性
を持たず、生まれるのです。しかし、その聖女は必ず孤児で、生ま

れる時には太陽神からの託宣を受け取ります。それは次の王位を引き継ぐ者の夢に現れるのです。つい先日、私の夢に、この光景と、ユレイアという名の少女が現れたのです。王と聖女の間には、国民が知らない瑣末なことも含めて、様々な儀式などがあります。事を進めるのは早い方がいいと、こうして来たのです。……これで、おわかりになっていただけましたか」

やはりカーライドの言葉の端々には、私達を下に見ている、自分が優位に立っているんだという響きがにじんでいるように感じられる。

リクス姉さんはあまり負の感情を表に出さない人ではあるが、隣にいる私には、姉さんが少し怒っているような空気が伝わってきた。この空間には黒いものが渦巻いているように私には見えた。

私は時間が経つにつれて、だいぶ落ち着いてきた。

今の話もなんとかわかるまでには、頭も冷えてきた。

だが、そうなるとう度は様々なことが頭を駆け巡って、また熱を出しそうになる。

今の話からすると、とにかく私はこの王子と共に城に行つて、これからずっと行動を共にしなければならぬ、ということにはわかつた。

だが正直言つて、カーライドとうまくやっていく自信はなかった。

私はきつと、不安そうな目でリクス姉さんを見ていたに違いない。

姉さんは私の背に手を当ててくれた。

もちろん、相手には悟られないように。

私はそれだけでも安心できた。そして、嬉しくなった。

だが、リクス姉さんに甘えてばかりはいられない。

そう、きつとこれは私にそれを教えてくれている手でもあるのだらう。

私は意を決することができた。

「殿下のおっしゃることは理解できました。しかし、荷支度をせねばなりませんので、少しお時間を頂きたく存じます。明朝までには済ませますので、殿下のご都合のよろしい時間にまたおいで頂ければと思います」

とりあえずそれだけを一気に言った。

それだけしか言えなかった。

それを言っただけでも、とても緊張して、心臓が口から飛び出しそうだった。

カーズライドはこちらを少しだけ見た。

その目の奥底には、何かどす黒いものが宿っているように、青色が少し濁っているように見えた。

「わかりました。それでは、また明日」

カーズライドは立ち上がり、部屋から出て行った。

その後を、王子のお付と思われる老紳士がついていった。

彼の存在に関して、今まで全く気にしていなかった。

ますます、カーズライドが信用できなくなつた。

そして、私は部屋で荷物をまとめた。

まとめると、下っ端の自分の物など、ほとんど共有のものだったから、いくらもなかった。

自分の小さな体に見合う鞆に入れても、まだ余るほどだった。まとめた鞆をベッドの脇に置いて、横になった。

今日は明日のこともあるからと、仕事を切り上げてもらったのだ。私としては、仕事をして気を紛らわせたかったのだが。

暇な時間があればあるほど、余計なことを考えてしまつて、不安な気持ちがどんどん沸いてくる。

と、部屋のドアを叩く音が聞こえた。

どうぞ、と私は応えた。

きつと部屋の仲間が何か取りに来たのだろう。

でも、今の私は、顔を上げて迎える気にはなれなかった。扉が開き、その人物が中に入ってくる。

そして、私に近づいてきた。

近づいてきた時、覚えのある匂いに、私は飛び起きた。

目の前にはリクス姉さんがいた。

「ちょっと、隣いいかな」

姉さんは笑顔で言う。

私は慌てて、姉さんのためにベッドのスペースを空けた。

そして姉さんが私の隣に腰を下ろした。

「……何で、姉さんがここに……」

私は驚きつつも、聞いた。
リクス姉さんは悪戯をしたような子供のような笑顔になった。

「みんなに後片付け任せてるちょっとの間、様子を見に来たのよ。
……なんか、ユレイア落ち込んでるみたいだったから」

最後、少し姉さんの声が悲しげに揺れた。

私は胸がきしむように痛んだ。

姉さんに心配をかけてしまったなんて。

「ありがとうございます。でも私は大丈夫ですから。少し経って、
落ち着きましたし」

その言葉に偽りは無い。

実際、時間が経って気持ちちは落ち着いた。

そして何より、リクス姉さんの声が私を落ち着かせた。安心させ
た。

あの王子とでもなんとかやっていけるような気がした。

なんとか笑って、リクス姉さんを安心させたかったが、たぶんそ
の笑みは引きつっているような気がした。

姉さんは、私の手を握った。

「でも……何かあったらいつでも帰ってきていいんだからね」

リクス姉さんは私の目を見て言った。

私は目の奥が締めつけられるような感覚になり、思わず目をそら
してしまった。

でもたぶん姉さんにはわかってしまっただろう。

それでも、今は泣いてはいけない。

私はなんとかこらえた。

「……ありがとうございます」

それだけを、なんとか言った。

声が震えていたから、姉さんにはバレていたかもしれない。
姉さんは、ゆっくりと手を離れた。

そしてリクス姉さんは部屋を出て行った。

姉さんが部屋を出て行った途端、次々と涙が目から溢れ出した。

顔は涙で濡れているはずなのに、火照っていて熱かった。

もうすぐみんなが戻ってくるから、それまでには泣き止んでいないと。

私は、今日ほど人の優しさが染みた日はないと思った。

目覚めると、カーテンの隙間から朝日が差し込んでいた。

私は体を起こし、洗面台に行つて髪を梳いて、顔を洗う。

泣きはらした目が見えてはいけなから、化粧もきちんとした。

これで、たぶんわからない、はずだ。

少し泣いたら、だいぶ覚悟が決まってきた。

現に、朝も普通に起きた。

そして、部屋に戻ると、リクス姉さんが扉の前に立っていた。

「カーズライド殿下が来ていらつしやるわ」

姉さんはベッドの脇に置いてあった私のみすぼらしい鞆を、私に差し出した。

私は有難くそれを受け取った。

「ありがとうございます。それでは行つてきます」

私は姉さんに深く頭を下げ、そして玄関へと歩き出した。

玄関には、カーズライドがいた。
「殿下のお心遣い感謝いたします」

実のところ、貴族の礼儀作法など知らないが、見よう見まねで貴族のご婦人方がやるように、スカートの手端をつまんで礼を取った。

「そのような挨拶は俺にはいらぬ。来い」

カーズライドは苦々しげな表情でそう言うと、私の手荷物を取って、さつさと外に出て行ってしまった。

何か違和感があると思い、すぐに気づいた。

言葉遣いが昨日とは違う。

昨日の彼の一人称は「私」だったし、一応丁寧語の使っていた。

しかし今日は「俺」で、言葉もぞんざいになっている。

まるでその態度に見合ったものになっていた。

私は突然の変化にまた動揺してしまったが、お付の老紳士に促され、馬車に乗り込んだ。

あの王子の隣に乗ったのだ。

結局目的地まで、ただ事務的なことを口にするだけの会話しかなかった。

城に着くと、私とカーズライドは国王 ラムイダスという名だと馬車の中で聞いた の前に通された。

ラムイダス王は、カーズライドとは違って、柔らかな顔に温かい笑みを浮かべている人だった。

その隣には、聖女 こちらはカメリア の、亜麻色の長い美しい髪を波打たせる美女がいた。

カメリア后の方に視線を向けると、ちょうどその彼女と視線が合ってしまった、慌てて視線を下げた。

馬車の中でも聞いたが、国王の隣にということとは、聖女は本当に后であるらしい。

下町のことばかりで、国の王族のことなど知らなかったので、馬車の中で様々なことを教えてもらった。

そして私は、それを聞いた時、背筋に電撃が走ったような感覚に襲われた。

もし聖女が国王の后になるというのなら、私はつまり、このカーズライド王子の后になるということなのか。

だが、ここまで来たからにはなるようにしかならない。
私はあまり深く考えないことにした。

それにしても、この優しげな人達から、どうしたらカーズライドのような無愛想強面な男が生まれるのか、ぜひとも教えてもらいたいものだ。

「ライド、隣にいる方が、お前の聖女なのか」

ラムイダス王がカースライドに問うた。

その声も、姿に見合って、優しいながらに年月の重みを感じさせる声だった。

ライドとはカースライドの略称のことだろう。

やっぱり王族って長い名前を略すって本当だったんだなあ、などとんきなことを私は思っていた。

「はい。ユレイア、という者です」

その返事の響きには、渋々、というようなものが含まれているような気がしてならなかった。

それに、国王といえど自分の父親に対する口調にしては、どこことなく硬かった。

カースライドは、ラムイダス王に対して何か複雑な思いがあるのか。

隣にいるせいか、彼の空気の変化がなんとなく伝わってきた。

ラムイダス王は気づいているのかいないのか、特に気にした様子もなく話を進めていた。

「それならば、顔を上げて、もう少し近くで話をしよう」

そう言つとラムイダス王は、玉座から立ち上がってこちらに近寄ってきた。

私は思わず顔を上げたが、動揺して動くことができなかった。

カースライドがそれを見兼ねたのか、私の腕をひいて立ち上がりせた。

そういえば、来る時に荷物を持ってくれたことといい、変に優しい所があるのは、父親の血を少しは受け継いでいるということなのだろうか。

私は、少し違和感を感じたものの、国王と聖女が目の前にいたので、そちらに思考を向けることにした。

そうして、私はちゃんと国王と聖女に向かい合った。改めて近くで見ると、二人の高貴な雰囲気気圧されそうになる。緊張して、心臓の鼓動が速くなるのを感じた。

「かわいい聖女様だ。これからライドをよろしく頼みます」
そう言うと、ラムイダス王は私の手の甲に口づけを落とした。
カーズライドに続いて、このような扱いを受けたのは二度目。
私は慣れないことに激しく動揺していて、何も言うことができなかった。

だが、カーズライドがその様子を苦々しげに見ているのは視界に入った。

なんとなく、気まずい気分になった。

「お世辞もたいがいにしたらどうですか。だいたい彼女は少し髪の毛が赤い。聖女としては少々派手ではないのですか」

何か言つかと思ったが、ついに言った。

途端に、ラムイダス王とカメリア後の顔が強張った。

私は、自分に言われた言葉よりも、二人がそのような表情をしている方が申し訳なくて、辛い気持ちになった。

しかし、二人はすぐに元の笑顔に戻る。

私はそこに、この親子の複雑な事情を察知した。

「私はそうは思わない。少し金の色も混じっていて、不思議で、綺麗な色の髪をしている。目はお前と同じ青い色だしな。お前のが海の色なら、彼女のは空の色のようにだよ」

ラムイダス王は私を見て、カーズライドに言うような話し方をし

た。

ラムイダス王は、人を惹きつける魅力がある人だと思った。

現に、私はこの王の言葉を素直に嬉しく感じている。

カースライドの表情は相変わらず苦いものであったが。

「……用件はそれだけでしょうか。それならば、時間が惜しいので退出したく思うのですが……」

早くお前の顔を見ない所へ行きたい、というカースライドの声が聞こえてきそうだった。

その言葉を受けると、ラムイダス王の雰囲気が変わったような気がした。

表情は相変わらず笑顔だったが、空気が引き締まった。

「ああ、そうだった。それだけではないよ。次期聖女と国王には様々な儀式があるということはお前は知っているね。だが、お前が知っている儀式は、互いに聖女と国王としての自覚を持ち、それを全てのものが認める儀式だ。その前提には、聖女、国王になる者の絆が深く、それぞれ己の役割を自覚することがある。そのため代々行われてきたことなのだが……カースライド、そしてユレイア、二人には一緒に旅をしてもらおうと思うのだ」

「はあー!!??」

私が言う前に、カースライドが大声を出していた。

彼がそんな風に取り乱した所など想像できなくて、私はそちらの方に驚いてしまった。

しかし、カースライド自身は、かなり取り乱しており、ラムイダ

ス王に食ってかかりそうな勢いだっただ。

「どうしてそういうことになるのですか?!」

下手をすれば胸倉を掴みそうだったが、さすがにそこは我慢したようだ。

そんな息子の様子にも、ラムイダス王は笑顔のままだった。

むしろ、楽しんでいるようにも見える。

「これは代々行われてきたことだ。お前もこの国の王となることを決め、聖女を見つけてきたのなら、先人の教えには従うものだぞ」
ラムイダス王の言葉に、カーズライドは何も言わなくなった。
だが、怒りの表情はそのままに、国王を鋭く睨みつけていた。

「……出発はいつ」

声のトーンが低くなり、言葉数が明らかに少なくなった。

「早ければ早い方がいい」

ラムイダス王の笑顔とは対照的に、カーズライドの悔しげな表情はますます濃くなる。

「では、できる限り早急に準備を整え、城を出ることができるよういたします」

声は怖いぐらいに沈んでいた。そして抑揚がなかった。

言いたくないことを言っているということだが、ありありと伺えた。

そして、静かに踵を返すと、国王の間から出て行った。

その足取りは、非常に重く、不機嫌さを隠そうともしていなかった。

私はカーズライドを見送って、一人残されてしまった。

すると、私は肩を叩かれた。

振り向くと、カメラリア後の顔があった。

その顔には、少し悲しげな笑顔が宿っていた。

「ごめんなさいね、急にこのようなことになってしまった」

「い、いえ、そんな……」

私は慌ててそう口にした。

この人には、優しさを感じても、威圧感を感じず、まだ口を開くことができた。

ラムイダス王も隣で切なげな笑顔を浮かべていた。

「どういう訳か、あいつはああいう性格になってしまっただけ。国のことを思う余りか、自分がなんとかしなければという使命感がありすぎるのかもしれない」

言われてみると、そうかも、と考える私は単純だろうか。

でも、カースライドのあの態度は、どうもただ単に親に反抗しているだけ、というのとは違う気がしていた。

複雑なプライドが彼の中でぶつかり合っているように感じ取れた。

「だから、聖女として選ばれた貴方に、ライドの心を和らげてもらえればと、思っているの。聖女は、ただ一人国王の近い人だから」

聖女の声は、天使の歌声を聞いているような、美しくて温かな響きだった。

私も、こんな風になれるのだろうかとか甘い憧れを抱いた。

だが、ふと最後の言葉で気になることがあった。

「あの……やはり聖女というのは、国王の后にならないといけないのですか……？」

馬鹿な質問だと思いつつも、恐る恐る私は聞いた。

やはり、あのカースライド王子と仲良くなるのはかなり不安だったからだ。

すると、二人は同じような笑みを浮かべた。

この二人、実はかなりお茶目なのかもしれない、と私は思った。

なぜなら、その二人の笑みは、無邪気に悪戯を楽しむ子供のよう
な笑みだったからだ。

「……今はそういうことになっているわね。一夫一妻だから。聖女
は国王の近しい存在となる必要性があるから、自然とそういう風にな
ってしまふのよね」

「ああ……私達は一目会った時から互いに惹かれあつたがな。聖女
とこの国の王は、不思議な力で惹かれ合うようにはなっているらし
い」
「……………」

やはり聖女は国王の妻になるものなのか。

しかも互いに惹かれ合うようになっていてだなんて。

とりあえず今のところは、そのような兆しは見えてこない。

正直、これからも見えてくるのか怪しいところだ。

不安は増すばかりだった。

だが、この二人のためにも、なんとかカースライドの心を開いて
みせなければ、と私は妙な使命感に燃えていた。

でもやっぱり、かなり、不安ではあるけれど。

なんかやっぱり物語ごとに文体がなんとなく変わってしまっな、やっぱり。

文体のテンションが違う気がする、自分。

主人公語りだからかもしれないが。

何はともあれ、出会い最悪な二人を書いてみたかったです(え)。ちなみに、私のネタには城ものがよくあるんですが、礼儀作法とか言葉遣いとかがすごいテキストです。

ちゃんと調べた方がいいんだろっけどなー……。

あんまりやりすぎても入りづらいから、あまりやらないってのもあるんですよ。

どうなのかな、そういうのは。

それを言ったら、国民って観念もどうなのよ、とか出てきちゃうから、やっぱこんな感じでいいかも。

だって、この関係を国民以外で何と言えっただのか。

領民とかはなんか嫌だ。そっちの方があってるんだとしても嫌だ。

そんな国のつもりはない。

それはそれとして、また神様設定作ってしまったよ。どうしようね(え)。

一つの世界で色々な物語を進行させるって実は難しいですよ…。とりあえず、これの世界観はまたこれとして。

ちなみに、BGMにCECIL流したら、バシッとくるのがあったので、一応それでいってみようかと。

「流星の跡」です。話のBGMってよりは、ユレイアのイメージソングっぽいかな。

ちなみに、これの略称は「アンサン」で(また安直な……)。

そして夜になった。

「お前、そこで何をしているんだ」

カースライドは、部屋の入り口で不審な顔をして私を見ていた。

「ここが今日、私が寝る所だと言われたのですが」

私は、恐る恐る答える。

「……………」

カースライドは、私を黙って数瞬見つめた。

「……………そうか」

そして、彼はハメられた、という顔をして、片手で頭に手を当てていた。

「ベッドに座ってる、というのも言われたのか？」

「はい」

「……………」

私が答えると、カースライドは今度は静かにため息を吐いた。

「まあ、こうなることは予想はできていた。ベッドはお前が使った方がいい」

「カースライド様は……………？」

「ライドでいい。敬語もいらさない。面倒だ。お前は、あそこでは何と呼ばれていたんだ」

あそこ、というのはきつと、私がいた娼婦館のことだろう。

私は、何となくその言い方にひっかかりを覚えた。

「ただ、ユレイアと」

が、気にしていてもしょうがない。とりあえず答えた。

「それなら、俺もそう呼ばせてもらう」

それだけ言うと、カーズライドは窓際のソファに腰を下ろした。私の質問には答えていない。

私は、少しずれて位置する肘掛け椅子に腰を下ろした。

カーズライドは、不審そうに私を横目で見る。

「ライドは今夜どこで寝るの？」

「……………俺は、このソファに横になる」

渋々、という風にカーズライドは答えた。

「それではいけ……………ない。近々旅立つのだから、今のうちに体は休めておかなければ。あんなに広いベッドで……………だもの。二人で寝たって狭くないだろうし……………」

「そういう問題じゃない」

敬語はやめろ、と言われたので、何とか使わないようにしようと、たどたどしく喋っている私の言葉を、カーズライドは遮った。

私は少し腹が立った。

じゃあ、どういう問題だというのだ。

もっとちゃんと言葉で説明してほしい。

「どういうことですか」

「……………」

腹が立っていて、思わず敬語に気をつけないで言葉が出た。

思ったことをそのまま口にした私を、カーズライドは、呆れたような顔で見て、ため息をついた。

その動作一つ一つが、どうにも頭にくる。

「本当にわからないで聞いているのか？」

「もちろん」

少し私は落ちつかないといけない、と思った。

あの王様や聖女様の期待に応えるためには、カースライドと少しでも親しくならなければいけないのだから。

しかし、カースライドはまたさらに深いため息を吐いた。

「お前は、なぜ俺の部屋で寝泊りしろと言われたのか、その理由がわかっているのか？」

カースライドは、少し私の方に寄り、低い声で言った。

それは、すごんで私を怖がらせようとしているように感じた。

それとも、怒りを表しているのだろうか。

「……………そのつもり……………だけだ」

私は負けじと、カースライドの目を見て答えた。

恐らく、王と聖女は将来的には、現在の二人と同じように、夫婦のなることになる。

もちろん、私とカースライドも例にもれることはないだろう。

それなら、二人になる時間が多い方がいい、と城の人達は考えたのだと思う。

国を治める人々は、夜の営みさえ道具にすると聞いた。

それなら、この現在の状況もうなずけると私は思っていた。

「お前は、それを正しいと思うか？」

カースライドは、部屋にいる理由の具体的内容については問わなかった。

あえて避けたようにも思えた。

「私は、それがこの国の伝統的なことなのだと思って……………た」

「敬語が話しづらいかもしれないが、外で王族だとバレるのは避けたい。だから、なるべく不自然にならないように心がけてほしい」

ただたどしく喋る私に、カースライドは呆れた顔で言い、また真剣な顔に戻った。

「……………まあ、確かに聖女が次期国王となる王子と寝所を共にすることは伝統的だ。だが、伝統だからと言って、それが今の時代に合っ

ているとお前は思うか？」

「言いたいことがわからないのだけど」

今度は比較的滑らかに言えたと思う。

カーズライドは、一呼吸置いて、先ほどと同じような低い声で静かに言った。

「俺は、全てが正しいと思っていない。正直、聖女だの神だのということも気に入らないし、信じていない。だが、この立場でなければできないこともある。この立場でなければ、俺が間違っていると思うことも主張できなくなる。だから、あえて今こうしている。俺の考えは、恐らく、いや、かなり高い確率で人々に受け入れられないことだろう。聖女とは、王のパートナーだ。同時に、王も聖女のパートナーであるのだが。お前は、この俺の考えに賛同し、パートナーとして共に歩むことができるか？」

カーズライドは、一気に言い切った。

私の意図をくんでくれたようで、本当に一気に言いたいことを言ってくれたようだ。

「私はここまで来た。それは変えることができない。私はもう帰ることはできない。私にだってプライドはある。帰ることは、私のプライドが許さない。選ばれたからには、貴方についていこうと思っています」

カーズライドは、つい熱く言い切ってしまった私をじっと見ていた。

本当に私で大丈夫なのか。見定めているようだった。

どうしても上目線のように感じるが、不思議と、もう嫌な感じはしなかった。

もしかしたら、カーズライドは全てにおいて真剣なんだ、ということがわかったからかもしれない。

この人はまつすぐで、意外と不器用なだけかもしれない。

別に生涯の伴侶、などという心構えがあったわけじゃないが、こ

の人の行く末を見ていきたい、という思いが、静かに私の心に沸いてきていた。

その感情は、自然と私に自信を持たせ、カーズライドをまっすぐ見ることができた。

「……………それなら、お前のことを聞かせてくれるか」

私は、一瞬カーズライドが何を言ったのかわからず、恐らく惚けた顔をして彼を見ていただろう。

だが、彼が私から視線をそらした表情を見て、何となく察した。

やっぱりこの人は、少し不器用なだけかもしれない、と確信した。

「そうね。少しずつ、お互いのことを話していきましょう。夜は長いから」

私は、思わず口から笑みがこぼれていた。

そして、私は話した。

私が孤児で、あの娼婦館に置き去りにされているのを拾われた、
というのはカーズライドは知っていた。

それをどこかで聞いて、私のいた娼婦館に来たらしい。

私は、娼婦という仕事が、恥ずかしいとは思っていないことも言
った。

私はもちろん下っ端で、仕事なんかさせてもらえなかったけど、
いつも見ていたリクス姉さん達を見ていれば、恥ずかしいなんて思
わない。思えない。

姉さん達はすっかりと自分の信条を持って仕事をこなしていた。
卑しい者と見られる視線にも耐えて、自分というものを貫いてい
たと私は思っている。

ただ、お客様を楽しませる仕事だった。

夜のことも、自分から誘いをかけることはなかった。

私は何も卑しいことはしていない。

私はまずそれをカーズライドに伝えておきたかった。

この人は、どうも階級差を気にしている観があるようだったから。
伝統的なものを疑う心はあるのに、その伝統的な偏見に縛られて
いるように、私は感じていたから。

カーズライドは、真剣な顔をして、私を見ていた。

「ユレイア、もう寝た方がいい」

私が一通り話し、口を閉じた時、カーズライドは言った。

いきなり名前を呼ばれたので、何だか私は緊張してしまった。

その呼び方が、姉さん達を呼ぶお客さんの声の調子に似ていたか
らかもしれない。

「ライドはどこに寝るの？」

私はごまかそうとこう返して、また振り出しに戻ることになる。

「だから、俺はソファアに寝る」

「だから、それはあまり体にいいとは言えないわ。やっぱりベッドで寝るべきよ」

「俺は、嫌だ」

今まで理論的に話を進めていたカースライドも、ここでは駄々をこねる子供のように、それしか言わない。

「……………だから、一緒に……………」

「俺は、ソファアで寝る」

そう言つと、カースライドはソファアに横になってしまった。

「……………」

また私は、胸のむかつきがこみ上げてきた。

こうなれば、私にだって意地がある。

私も座っていた肘掛け椅子に座り込み、寝る体勢に入った。しばらく、沈黙と共にその状態が続いた。

ふと、私に近づくと、動く気配がした。

と思うと、急に宙に浮かんだように感じた。

私は驚いて、目を開けた。

すると、近い所にカースライドの顔があつて、動揺してしまつた。

「な、何……………」

驚いてしまつて、私は言葉が出なかつた。

「お前を椅子に寝かせて、出発し始めて体調を崩されても困る。しようがないから、ベッドに入るぞ」

「え……………ええ……………」

まさかこうなるとは思っていなかったのだから、私はうなずくことしかできなかった。

カースライドは、全く私に目を合わそうとしなかつた。

そして、ゆっくりと私をベッドに下ろした。

私は、だんだん落ち着いてきた。そして、カーズライドを見上げる。

カーズライドは、私の方に視線を向けてはいるけれど、視線をわずかにはずして、直接目が合うことを避けていた。

とりあえず、私は布団の中に潜ることにした。

そして端に寄り、カーズライドが入れる空間を空けた。

カーズライドは、まだ躊躇っているようにベッドの脇に立っている。

空いた空間をじっと見ている表情は動かないので、何を考えているのかわからない。

それでも、今にもソファアに戻ってしまいそうに思えたから、私はカーズライドの手を少し引いた。

カーズライドは少し驚いたように目を見開いて、私を見た。

そこで、やっとカーズライドと視線が合った。

カーズライドは、戸惑ったように、やはりすぐに視線を彷徨わせる。

この人は、本当に女性というものに慣れていないのだろうか。

王宮暮らしをしているのに、ここまで初心のような反応をする人もまた珍しいと私は思った。

「いつまでもこうしていられないわ。明日もあるんだから、早く休みましょう」

私は堪りかねて言った。

「ああ」

すると、カーズライドも覚悟を決めたのか、ベッドに体を滑り込ませた。

「では、おやすみなさい」

「おやすみ」

私がそう言っつて、ベッドに仰向けになった。

カーズライドも答えて、私に背を向けて横になった。
そして、私達はやっと眠りについた。

カーズライドの態度をおかしく思いながらも、私も実は一緒のベッドに誰かと寝ることなど経験がなかったから、不思議な気持ちで目を閉じた。

だが、その気持ちは不快ではなく、不思議と、安心できるものだったから、私はすぐに眠りにつくことができた。

そして、翌日。

私が目覚めると、まだカーズライドは横になっていた。

窓を見ると、空の色がやや白みがかかり、日が登っている頃だった。娼婦館にいた頃は、このぐらいの時間から準備をしていたから、その癖が出たのだろう。

とりあえず、カーズライドを起こさないように、私はベッドから出た。

幸い、城の召使いの人が気を遣ってくれたのか、服は着替えやすいものだった。

そして、私がちょうど着替え終わると、カーズライドが身じろぎをして、ベッドから起き上がった。

「おはよう」

私に着替え終わった振り返りざまに声をかけた。

カーズライドは、少し寝ぼけたような顔をして私を見る。

「……………おはよう」

いつもの仏頂面で、カーズライドは私からすぐに視線をそらした。

私は、用意されていたカーズライドの服を差し出した。

「お着替え、どうぞ」

「……………自分でそれぐらいできる」

カーズライドは、私に近寄って、ぶつきらぼくに服を取り、言った。

だが、やはり私には視線を合わせない。

着替えの時は、あえて視線をはずすようにして、その時だけ静かな空間になる。

だが、ふとカーズライドが言葉を発した。

「明日には出発できるようにするから、お前も準備をしておけ」
衣擦れの音が止んだ。恐らく着替えが終わったのだろう。

私はそう察して、振り返る。

「わかりました」

私は、きちんとカーズライドに顔を向けて答えた。

カーズライドも、私の顔を見ていた。

その顔が、何だか眩しいものを見るように目を細めていたのは、
どういうことだったのだろう。

そして、本当に翌日、私とカーズライドは城を出発した。

出発は、城の数名の者が見送る簡単なもので、静かに私達は出発した。

最初はどうなることかと思っていたが、今の状態なら、これから
何とかやっていけそうな気が、私はしていた。

晴れ渡った青空も、その私の気持ちを高めていた。

とりあえず、二人出会い&和解編完了。

いや、和解ってわけじゃありませんが（苦笑）。

こんな調子で、彼らはこれからお互いを理解しあっていければな、と。

というか、未だにカーズライドもユレイアのキャラもつかめません（おい）。

たぶん、彼らはこんなんだよなー？と思いつながら書いてます……。もしかしたら、そんな感じが文に現れてるかもしれませんが……。私の方も、これから彼らを理解できていければと思います。

いや、カーズライドがいまいちツンデレなのか何なのかわからなくて……。

まあ、色々彼なりの心情があるのですが、ユレイア視点だと書ききれないのですよねー！。

それもおいおい明かせていければ、と思います。

基本ラブラブ大好きなので、もしかしたら早いかも（え）。

ユレイアの方も、娼婦館で育ったから、女性らしく、と考えてやっています。

まあ、でも考えてる人が私なので、どこまでできるかは怪しいところですが（苦笑）。

さて、次からはいよいよ旅立ちます。

色々な国にいきます。

番外編ですに出ているので、それを何か消化していければ、と。

<番外編> Closed World

そこは閉鎖的な空間だった。

しかし、そこにいる天使にはその世界が全てだった。

それは天使のために用意された箱庭。

神の使いとして、世界の均衡を保つ役割を負わされた天使に与えられた、楽園のような鳥籠。

今日の朝も彼女の歌声で朝を迎えた。

いつもいつも、その日の始まりと終わりには、彼女の歌声があった。

彼女の歌声により、生命は活動を始める。

彼女は、世界だった。

私は、その彼女の護衛と世話役を任されている。

空中に浮かぶ城の庭に閉じ込められた彼女の話し相手、とも言えた。

「おはようございます」

透き通ったガラスに覆われた、日差しに溢れた庭に入る。

光が溢れる庭なのに、感じる温度はやけに涼しい。

その庭の中央には、大きな、緑の葉が生い茂る木があり、そこに彼女はいた。

木によりかかっていた彼女は、僕の声に反応するように、その目

をこちらに向けた。

「おはよう」

僕を認めると、彼女の顔はほころんだ。

その声も、毎日の歌声と同じように美しく澄み、僕の体に響き渡った。

最上級の金で作られた鈴の音色のように、優しく。

そして、僕を見るその目は、瑪瑙のように深い色だった。

彼女はまるでこの世の宝でできているのかと思うほど、美しい人だった。

僕は、その彼女の近くにいることを許されている。それだけで名誉なことだった。

「今日のお加減はいかがですか？」

僕は彼女の隣に座ると、いつものように尋ねた。

彼女は、少し考えるように目を横にそらして、しばらく黙る。

「問題ありません。良好です」

「そうですか」

僕は少し複雑な気分になった。

彼女は、まるで自分が作り物のように、今日の体の具合を伝える。

他の人にとっては、何でもないことかもしれないが、僕はそれがなぜか気になっていた。

気になることはそれだけではなかった。

なぜ彼女がここにいるのか。

なぜ世界のために歌を毎日歌うのか。

時に彼女の涙は雨となり、息吹は風となる。

彼女の全てが世界を動かしていた。

彼女によって、世界は息づいていた。

なぜ彼女は、このような役目を背負うようになったのか。

「貴方は、ここから出たいと思ったことはないですか？」

直接聞く代わりに、僕はいつもこう聞いている。

僕は彼女に憧れてこの仕事を志した。

そして、どうしても聞きたかったことだった。

それを聞いてはいけないと、知っている。

だけれど、僕はこの気持ちを抱えたまま彼女に向き合うことはできなかった。

だから、どうしても口をついて出た。

このせいで僕が罷免されても、それはそれで悔いはない。

だから、僕は待っていた。

「……………出たいです……………」

彼女のその言葉を。

ずっと待っていた僕の行動は早かった。

迷うことなど、何もなかった。

彼女の手を取って、この城を出る。それだけのことだ。

だが、さすがにそう簡単には出させてもらえそうにはなかった。

僕が彼女の手をひいて庭から出ると、すぐに城の者に見つかってしまった。

覚悟はあったが、何とか不穏なことはせずに城を出たかった。

とりあえず僕はできる限り城の中を逃げ回った。

外に出れる抜け道は知っている。

城には、緊急時のために関係者しか知らない脱出口がいくつかあった。

僕は必死で頭の中に城の配置図を思い描き、最も近い脱出口へと向かっていた。

ときたま、何も喋らない彼女の、その存在を確認しながら。

彼女はあまりにも存在が薄く、こうして手を握っているのに、どこかに飛んでいきそうだった。

そして、脱出口にやっと着いた、と思った時だった。

「そこまでだ」

脱出するための、小型飛空艇の前には、黒い服に身を包んだ僕と同僚と、大勢の城の警備の者がいた。

僕と彼は、一緒にこの城の警備として入った。

同年代の僕らは気が合い、苦楽を共にしあつた。

時が経つと、僕らにも昇進の話が来る。

目指す道が違うのは知っていたこと。

だが、役職は違えど、僕らは時には協力し、理解し合っていた。

その君が僕の目の前にいる。

「どいてくれ。僕は君と争いたくはない」

しかし、彼は僕を鋭く見据えた。

どこかその目は、悲しげにも見えた。

「そういうわけにはいかない。聖女をこの城から出すわけにはいかないんだ」

僕は、だんだんと苛立ってきていた。

なぜ邪魔をする。なぜ彼女は束縛される。

「お前は聖女の恐ろしさを知らないんだ」

気づくと、周りの者は驚いた顔で固まっていた。

僕はどうやら思ったことを口に出していたらしい。しかもかなり

の大声で。

目の前の、警備長の彼は苦い顔をしていた。

「恐ろしさとは何だ。彼女はこんなに可憐で儂げだ。彼女はただ一人の美しい女性だ」

僕の言葉を聞くと、彼はますます苦い顔を濃くした。

何だ。僕は一体何か変なことを言っているのだろうか。

「やはり侵食が進んでいるな。その状態のお前を、城に出すわけにはいかない」

そう言つと、彼は腰に差していた長剣を金属がこすれる音ともに引き抜いた。

その音は、この場の空気を緊張させた。

「できれば、君とは戦いたくなかったな」

僕は残念だ、とため息をつき、自分も腰から剣を抜いた。

「だが、僕はここであきらめるわけにはいかないんだ」

戦っている時のことは、あまりよく覚えていない。

日ごろから訓練をしているから、体は勝手に動く。

だが、今日はやけに調子が良い気がした。

そして、気づいた時、戦いは終わっていた。

僕は、彼の胸に自分の剣を突き立てていた。

心臓が動くのと同じリズムで、胸からはまだ新しい色をした血が溢れている。

不思議と僕の心は落ち着いていた。むしろ、冷え渡っていた。

ゆっくりと剣を抜き、僕は彼女の手を引いて、彼の向こうにある飛空艇に進んだ。

「ヤツを捕まえる！！」

心臓から血を流し続け、起き上がれずにいる彼の元には警備兵達が集まっていた。

そして、彼はその集まってきた兵達に向かつてそう怒鳴っていた。さつきまで黙って見ていた警備兵達は、その声を聞いて、僕を捕まえようとした。

が、なぜか彼らは、ある一定の距離以上僕に近寄れないでいた。それはこちらには好都合で、僕は飛空艇に無事に乗ることができ、城を脱出した。

城を脱出した時、彼の叫び声が聞こえた気がした。

ここからは、僕の知らない話。

「何！ 聖女を取り逃がしただと!？」

城の管理を任されている大臣が、兵からの報告を聞いて、その顔色を変えた。

「何てことをしてくれたんだ！ お前らはあの聖女がどういうものか知らないから、そのようなことができたんだ！」

激しく怒っているのに、その顔は土色に近いほど青ざめていた。

報告した兵は、訝しげに、大臣に尋ねた。

「警備長もおっしゃっていましたが、あの聖女は一体何なのですか」
大臣は、唇を噛み、言うことを逡巡していたが、意を決したようにため息を吐くと、少しずつ話し始めた。

「少数の者のうちで進めるつもりだったが、こうなってしまうのは仕様がなない」

大臣の緊迫した雰囲気、尋ねた兵も息を飲む。

「あいつは聖女なんかじゃない。人間の形をした、人を食らう化け物なのだ。大木のような体を持つかと思えば、その腕は鳶のように巻きつき、人の養分を乾くまで吸う。しかもその力は強力で、催眠術のようなものを使って人を引き込む。本当の姿はあんな女の形などではなく……」

「なぜ、そのような者が聖女などということになったのですか？」

事は急を要していた。

兵は大臣の言葉を遮るように質問をした。

大臣も、やや取り乱しそうになっていたのを落ち着けられ、兵の質問に答える。

「今のこの世界も、ほんの何十年か前までは荒地だったんだ。その化け物のせいだな。だが、私達はあの化け物を押さえ込む方法を見つけ、さらにその力を使って荒地をまた緑に戻す方法を見つけた」

「それが、今の聖女なんですか」

大臣は兵の問いにゆっくりとうなずいた。

「奴らの催眠術は強力だ。その声によつて生命を活性化させて、数十年という短い期間でここまで復興することができた。そして、この城には、奴らが弱る草の匂いと、音を流し、奴らの数を少しずつ減らし、コントロールできるようになっていったんだ」

「ではなぜ、今回護衛官が催眠術にかかってしまったのでしょうか」
「私達が見つけた方法は、あくまで奴らを弱らせる方法だ。殺すには、やはり直接的な方法しかない。奴らの力は強力だから、弱まったとしても、いくらかの力はあっただろう。その力を使って、ゆっくりと長い時間をかけて身近にいたあの男に催眠をかけていったのだろう」

ここで大臣は、悲しげに顔を伏せた。

兵はその意味を察し、少し大臣から目をそらした。

「では、彼は……」

「まず第一の犠牲者だ」

「さあ、ここまで来れば、ひとまずはいいでしょう」

僕は飛空艇をすぐ近くの森に下ろした。

あまり飛んでいると、やはり目立ってしまう。

飛空城ができてから、空を飛ぶものが珍しくなくなったが、そのために空は管理されているので、不審な飛行物体はすぐに見つけれ

れてしまう。

地上にいれば、いくらでも隠れることができる。

僕は彼女の方を見た。

彼女は、ゆっくりと辺りを見回していた。

「……………誰も、いません」

僕は彼女に近寄り、手を差し出す。

「はい。これで貴方は自由になりました。少しの間不自由な思いをするかもしれませんが、僕が貴方をお守りします」

僕は、彼女を城から脱出させた達成感で胸がいっぱいだった。

その僕を、彼女は笑顔で見ている。

「そう……………アリガトウ」

突然彼女の赤い瑪瑙の瞳の奥にある瞳孔が開いた。

かと思うと、僕の腹に鈍い衝撃がきた。

「え……………」

僕は驚いて、衝撃のあった自分の腹に目をやるうとした。が、今度は足に衝撃がくる。

僕の視界は、そこで

暗転。

C l o s e t h e w o r l d

- Separate the sky - 【1】

城を出発して、二週間ぐらいが経った。

私達は、とりあえず国境を目指して歩いた。

王子と聖女の旅は、国の中を回るよりは、外の国に出るといふ。

新しいことを見聞するための旅だから、見知らぬ他国へ出る方が
良いらしい。

そして、ユレイア達は国境の関所に来ていた。

普通なら、もう少し早く着けるのだけれど、娼婦館の周り以外は、
外にあまり出たことのなかった私は、物珍しくてついつい寄り道を
してしまったのだ。

その度に、カースライドは仏頂面を嫌そうに歪めていた。

そしてまた私達は違う国へ出て行くこうとしている。

これからは、今までに見たことも聞いたこともないものに出会う
かもしれない。

そう思うと、私の心は躍りだしそうだった。

「遊びに行くんじゃないんだからな」

その気持ちが表に出ていってしまったのか、カースライドが呆
れたように、私に囁いた。

私は慌てて、持ち上がっていた口の端を元に戻した。

「わ、わかってるわ」

「ここから先は、私達が関知できない土地となっています。何が起
こりましても、王子や姫をお助けすることができません。どうか、
お気をつけください」

関所の門番の言葉を受け、私達はついに関所の門をくぐった。

ここからはもう別の国だ。

そこは、鬱蒼と茂る森が広がっていた。

息を吸うだけで緑の匂いが口に、肺に、体全体に広がっていく。森らしい、少し湿った涼しい風も弱く流れていた。

そして、私達は先に続く道を歩き始めた。

「隣同士の国なのに、交流とか、そういうものはないの？」

だんだん敬語を使わないで話すことにも慣れてきた。

カーライドは、私の言葉を受けて、嘲笑うような、皮肉な笑みを浮かべた。

「やはり、お前もそう思うか？ おかしいと思うだろう？」

何となくカーライドの言い方がひっかかったが、私は素直にうなずいた。

「そもそも、この世界のおかしい所だ。この世界には、多くの国が存在しているはずなのに、全くお互いに干渉しようとしな。まるで自国以外が存在していないかのように、無関心に振る舞い、自国の文化のみを成長させている」

「お互いが存在していないかのように振舞うなら、なぜ関所があるの？」

「そこがまたおかしい所だ。あくまで、存在していないかのように扱っているだけだ。本当は、ある程度の範囲ならその存在を認識しているはずだ。だからこそ関所がある。ただ、お互いに干渉をしないんだ」

「何のために？」

「それは誰も口にしないんだ。恐らく、それを王と聖女が知っている。そして、これから俺達はそれを知ることになるんだろう」

「……………そう」

いまいちはずきりしないことで、私の胸の中には、何か靄のようなものが残ったままだった。

だんだんと不安が増してきて、希望と拮抗しだしてきた。

「疑問に思ったことを素直に言うことは良いことだと、俺は思う。それがすぐにわかることではなくても。そういう姿勢は好ましい。今まで会った女に、そういう者はいなかった。いても、腹の底で何を考えているかわからないような者ばかりだった。お前は那点……。ああ、まあ、いい。とりあえず、お前は俺のパートナーとしてやはりふさわしいのかもしれない」
私の心境を察したのか、カーズライドは珍しくスラスラと言葉を並べた。

いつもはぶつ切りの言葉しか言わないのに。
いや、今の言葉も、少しだけぶつ切りだったが。

カーズライドは、少し照れているのか、言葉を言う時も、言い終わった後も、ただ前を見ていた。

「……ありがとう」
私は嬉しくて、素直にそう言って、カーズライドの背中に軽く触れた。

すると、カーズライドは驚いたように、大きく震えて立ち止まった。

「……?」

まさか私はそのような反応を示すとは思わなくて、同じように目を見開いて立ち止まってカーズライドを見上げた。

「ば、馬鹿者！ 急に触るな！」

カーズライドはそう言うと、また歩き出した。

少し歩調が速くなり、私は慌ててついていった。

また私は、カーズライドを怒らせてしまったのかと思い、それからは話しかけることができなかった。

そうしてしばらく歩いていると、カーズライドが立ち止まった。私もならって立ち止まり、カーズライドを横目で見る。

彼は、眉間に皺を寄せて、険しい顔をしていた。そして、辺りに視線を走らせて、警戒の色を露にしている。その雰囲気はただならぬものを感じて、私も辺りに神経を走らせる。

すると、割りと近くで、葉がこすれる音がした。私もカーズライドも、すぐにそちらの方を振り返った。

すると、草むらの影から何か長い影が私達に向かってきた。カーズライドは、腰に帯びていた剣を咄嗟に抜いて、長い影を剣ではじいた。

細長い影は、また出てきたのと同じ素早い動きで草むらに戻る。カーズライドは、その草むらに向かって剣を構えたままで立っている。

私はどうしようもなく、とりあえず迷惑をかけないようにと、カーズライドの側で辺りに目を配っていた。

長い影が草むらに戻った途端、今度は辺り中の草むらで葉がこすれる音がした。

得体の知れない何かに、周りを囲まれてしまっている。

私とカーズライドは、姿の見えない敵に焦りを感じていた。

カーズライドも、私と同じように辺りを見回していた。

すると、草むらから私達の身長と同じぐらいの、ものが出てきた。草むらから出てきて、森の木々からもれる光に当たって、その物体が姿を現した。

「!?」

私もカーズライドも、一瞬驚いて、思わずその物体をじっと見つめてしまった。

出てきたのは、私達と同じ、人間だった。

その人達が、草むらから4、5人出てきた。

その全ては女性だったが、姿は、短い髪だったり、長い髪だったり、肌が黒かったり白かったりなど、様々な特徴を持つ人々がいた。先ほど、長い影が現れた草むらからも、長い髪の人間の女性が出てきた。

「ど、どういうことだ……？」

カーズライドはうるたえて、咳くように言った。

私も全くわからず、その問いに答えることができなかった。

すると、女性の一人が前に進み出て、にこやかな笑顔で私達に言った。

「驚かせてしまって、すみません。私達はこの森に住むモノです」

「見たところ、旅の方とお見受けいたします。よければ、私達の集落で休憩をしていきませんか？」

前に出てきた女性の後ろからも、褐色の肌の女性が言う。

彼女は、私の目をじっと見て話していた。

私は、何だか不思議な気持ちになっていた。

彼女の、宝石のような光沢を持った橙色の瞳に見つめられると、頭に霞がかかったように働かなくなってくる。

胸がざわつく感覚を覚えたが、それすらも頭は受け付けず、だんだんとざわつきがおさまっていく。

「ライド、お言葉に甘えてみてはどう？」

私は、そう言った途端に、足が前に進んでいた。

「ユレイア！」

だが、すぐにその足は、カーズライドが私の手首を掴んだために止められた。

「離れる！」

同時に、どこかから少年のような声が聞こえ、私の頭の中の霞が

一気に晴れた。

私は慌ててカーライドの方へ、進めていた足を戻す。すると、女性達は悔しそうに顔を歪めた。

途端に、私達に向けられていた宝石のような目が怪しく光り、それはまるで人間のものではないような、むしろ獣のように瞳孔が細長く開いた。

そして、その腕や足も、周りにある木々のような物質に変化し、私達に腕だったものを向けた。

その腕は、まるで蔓のように、すごい速さで私達に向かってきた。さっきの影はこれだったんだ！

その腕のようなものは、私とカーライドをちょうど別方向に引き裂いた。

カーライドは剣を持っているが、私は丸腰。

周りの女性達は、皆あの不気味な物体に姿を変えていた。

その姿が、もう女性の形を取っておらず、頭だったものを胴体とほぼ同じ大きさになり、大きな花のようなものがついていた。

胴体は、服はすっかり消えており、大木のような太い胴体が見えていて、その下の足の部分は、腕の蔓のようなものが何本もついで、蛸のようにうごめいていた。

先ほどの美しい女性の面影など、どこにもない。

その薄気味悪い化け物が、今カーライドと私の周りを囲んでいる。

化け物が、私を狙おうとするのは明白だった。

私はすっかり腰が抜けてしまい、動くことができなかった。

しかし化け物は、私を哀れんで、攻撃の手を緩めるような心情は持ち合わせてはいないだろう。

私のすぐ近くにいたそれは、腕を高く振り上げた。

「ユレイア！！」

カーズライドが私を呼ぶ声がした。

殺される！

私はどうすることもできず、その現実を直視しないよう、思わず目を閉じた。

しかし、次の瞬間に訪れるだろうと思っていた衝撃はこなかった。恐る恐る目を開けてみると、私の目の前には、黒服の人物が立っていた。

その手には、黒くて細長い棒が握られていた。

その向こうを見ると、化け物の触手のような腕はへし折られている。

そのせいか、化け物は目の前の黒い人物を見ているだけで、動くとしらない。

むしろ、不利と感じたのか、少し後ろに下がった。

その様子を見て、周りの他の化け物達も動揺したようだ。

聞いたことのないような、頭が痛くなるような高音を発していた。

これは、この化け物の言語なのだろうか。

すると、カーズライドはこれを好機と見たのか、私の腕を掴んだ。「行くぞ！」

そう言うとカーズライドは、怪我を負った化け物の方へ走っていき。

私も慌ててそれについていく。

そして、カーズライドは怪我をした化け物に向かって剣を一振りした。

化け物はその反動で横へそれ、森への道が開く。

カーズライドはすかさずそこへ入り込んだ。

そして私達は、森の奥へと逃げ込んでいった。

R
A
N

*
*
*
2
0
0
6
/
1
0
/
1
*
*
*

- Separate the sky - 【2】

「ここまで来れば大丈夫だろう」

カーズライドは、しばらく走ってから立ち止まり、私の腕を離れた。

私は、カーズライドについていくのがやっとで、腕を離されると膝に手をつき、大きく呼吸を繰り返していた。

カーズライドは、ただ黙って私が落ち着くのを待っていてくれた。

「あんたら、大丈夫か？」

頭上から声がして、私とカーズライドは、驚いて頭上を見上げた。すると木の上に、あまり見慣れない黒服の少年がいた。

さつきは後姿だったので、一瞬わからなかったが、よく見ると、私を化け物から助けてくれた人物だった。

「あ、さつきの……」

私がその声をかけようとすると、少年は木から飛び降りた。

そうして近くに寄ると、私はあることに気づいた。

「……耳」

「耳？」

少年が不審そうに私の言葉を返したので、私は慌てて口をふさいだ。

思わず、見たままのことを口に出してしまった。

少年の耳は、本来人間があるだろう場所になく、その代わりに、やや上の方に黒い毛が生えた三角形の耳があった。

そう、それはまるで犬のようで……要するにかわいかった。

「お前は誰だ？」

私が少年を呆けた顔で見ていると、カーズライドが少年に声をかけた。

最初に私に会った時のような、冷えた声だった。

私は、思わず体を大きく震わせた。

「とりあえず元気そうだな。まずそっちが名乗るべきだろ」

少年は明らかにカーズライドの態度を不快に感じたらしく、少年も無愛想に返した。

「……私はカーズライドという。旅の者だ」

カーズライドは不満そうに、渋々答えた。

「俺は、この国の自警団をしてるヤーシユだ」

「あの、さつきはありがとうございます」

とりあえず、私はお礼を言うことにした。

「別に、仕事だから気にするな」

ヤーシユは表情を動かさずに答える。

なんだか、視線をわずかにそらされているのが少し気になる。

カーズライドといい、何で私は目をそらされるのだろう。

娼婦館にいる時は、そんなことはなかったのに。

「あの化け物は一体何なんだ？」

すると、カーズライドがまた不機嫌そうに口を開いた。

さつきは私のことを助けてくれたけど、やっぱりまだ怒っているのだろうか。

また私の気持ちは少し沈んだ。

「あれは昔、この国では守り神として扱われていたんだ。元々は一匹で、それは聖女と呼ばれていて、この国の中枢である空中都市の城に隔離されていた。しかし、それが何かの理由で城を抜け出して

しまったんだ。それは本当は、さらに昔にこの国を滅亡寸前までにした突然変異の怪物だった。そして抜け出した怪物は人々を襲い始めた。つまり、あいつらの食べる物っていうのが、人間だったり動物だったりするんだ。そいつは自分一人でも別の個体を生み出すことができる。いわゆる両性具有なのではないかとみられているんだが。あいつらについては、よくわかっていないんだ。ただ抵抗するだけで精一杯だな。何のせいかわからないが、国の中枢である空中都市ともつながらなくなってしまったし、地上には空中へ向かう乗り物を操縦できる者もない。唯一できた者も、あいつらに殺されたんだ。だから、空と俺達のいる地上は分断されてしまったのさ。……って、そんなこと、この国の人間なら常識のはずだが。お前ら、どこの者だ？」

ある程度を説明を終えてから、ヤーシユはふと気づいて私達を見る。

「俺達は実はこの国の隣にある国からやってきたんだ」

カーズライドがそれに答えた。

すると、ヤーシユは驚いたように目を見張った。

「お前らは別な国から来たのか?!」

何やら嬉しそうに大声をあげて、ヤーシユはまじまじと私達を見た。

「昔、噂でここ以外に国があると聞いていたが、本当に別な国のヤツらを見るのは初めてだ。思えば、お前らは獣みたいな特徴がないしな。何か変だと思ってたんだ」

「まあ、そのことは別にどうでもいいことだ。できれば、この国についてもっと詳しく聞きたい。それと、夜露をしのげる場所も探したい。そういう場所に案内してはもらえないだろうか？」

言い方は、カーズライドにしては丁寧だが、やはり抑揚がない。

だが、今度はヤーシユは不快に感じた素振りは見せなかった。

「ああ、とりあえず俺のいる集落に案内しよう。よければ、あんたらの話も聞かせてくれよ」

その目は、好奇心に輝く少年の目だった。好奇心の前では、カースライドの無愛想さも見えなくなるのだからか。

しかしここで私は、先ほどからずっと気になっていたことを聞くと思った。

このままいくと、聞きそこねそうだから。

「あの」

私が呼びかけると、カースライドもヤーシユもこちらを振り向いた。

「何だ？」 ヤーシユが聞く。

私は意を決して、言った。

「この国の人達は……みんなそういう耳があったりとか、何か動物のような特徴があるんですか？」

「……………」

カースライドとヤーシユは同じような呆気に取られた顔をして、私を見ていた。

ああ、もしかして私はやってしまったのだろうか。

思わず、先ほどのヤーシユのような興味津々、という風な声を出してしまったからだろうか。

こんなことに興味津々というのも、私自身を疑われそうだ。

急にいたたまれなさが身に染みてきた。

でも、やっぱり何でそうなのか気になるし……。

私が心の中で色々考えを巡らせていると、ヤーシユが照れくさそうに自分の耳を撫でながら答えた。

「まあ、そうだな。俺みたいのばかりじゃなくて、他にも、動物の特徴のあるヤツらがいる。何でか、地上にいるヤツらだけがそういう特徴がある。そういう研究するのはもっぱら空中都市のヤツら

で、俺らにはわからないんだ」

「そ、そうですね。ありがとうございます」

私は何だかいたたまれなさに、早口にそう言ってしまった。

「じゃ、じゃあ、俺についてこい」

そして、ヤーシユは歩き出し、私とカーズライドはその後ろについていった。

何とも不思議な空気を抱えたまま。

でも私は、これからいく集落には、ヤーシユのような耳とかを持った人達がいるのかと思うと、わくわくする気持ちを抑えることができなかつた。

- Separate the sky - 【3】

ヤーシユの案内で着いた場所は、森の奥深くにあった。

木々の間から差す日の光が、そこに集まっているように、集落が浮き上がって見えた。

集落の門をくぐると、ユレイアは途端に安堵感に包まれた。

この場所に、何か見えない力があるようにユレイアは感じた。

ユレイアは思わず、首を忙しく動かして、周りを見回していた。

「どうした」

そんなユレイアを不審に思ったのか、カースライドが声をかけた。

ユレイアは自分の行動に気付き、照れ笑いを浮かべた。

「いえ、何だかここは不思議な感じがしたから、つい……」

「……特に何もないなら、あまり不躰に見るものじゃないぞ。相手にも失礼だし、不慣れなのが知られてしまうぞ」

カースライドは今にもため息をつきそうな呆れた目をして、ユレイアを見た。

「はい……ごめんなさい……」

ユレイアは反論することができなかった。

「でも、そのお嬢さんの感じてることはあながち間違っではないぞ」

ヤーシユが前を歩きながら、声をかけてきた。

「俺も何でか知らないが、ここだけはさっきあんたらが襲われたような魔物が入ってこないんだ。だからみんなここにいるわけなんだが。もしかしたら、ここには何かあるのかもしれない」

「やっぱり、そうなんです……」

ユレイアは自分の感覚が肯定されて、何となく嬉しくなる。

「なぜかわからないようなものはアテにはできないな。偶然魔物が

入ってきていないだけかもしれない。また、入っていても気づいていないだけかもしれない」

カースライドの冷たい声がヤーシユに返された。

ユレイアは、それだけで気分が一気に冷めた。

「ま、それを言われちゃ何も言えないがな。だがそついう話は、頭の悪い俺と話すより、これから会ってもらつ団長と話した方がいい。で、ここが俺達自警団の本部だ」

前を歩いていったヤーシユが立ち止まり、ユレイアとカースライドも続いて足を止める。

ヤーシユが示した場所に二人は視線を移した。

そこは、集落の中央よりやや離れた奥まった場所で、一見すると地味な木造の小屋だった。

ヤーシユが示した小屋の前に、人影があった。

近づくくと、影になっていた部分もだんだんと見え、相手の形が認識できてきた。

白髪の背は高くはないが、がっしりした体つきの男性だ。

彼の耳も動物のそれで、後ろから細長く尾が見えた。

どうやら彼は、白猫の特徴を持っているようだ。

「……ヤーシユか……後ろの人達は誰だね」

白髪とその落ち着いた雰囲気からか、外見にも声にも貫禄が出ていて、年長者のように見える。

しかしよく見ると、顔にはしわがなく、肌のハリもあるので、若くも見える。

声もしゃがれているわけでもない。

要は年齢がよくわからない人物だ。

ユレイアは、別に彼が厳しい口調で話したわけでもないのに、何と

なく彼のことを怖いと感じた。
何となく、得体の知れないものに感じる漠然とした恐怖を。

「ああ、サクール。外でヤツらに襲われてたところを助けたんだ。旅の者で、この国のことが知りたいようだったから連れてきたんだ。この国でまともな集落なんて、ここぐらいしかないだろうしさ」

サクールと呼ばれた男性は、流すようにユレイアとカースライドに視線を向け、すぐにヤーシユに目を戻した。

優しい笑顔でいるのに、その視線にユレイアは寒気を覚えた。彼は間違いなく自分達を不審に思っている。

あのような怪物がいるこの国で警戒することは不自然ではないが、彼の視線は、それ以外にも何かを含んでいるようだった。

「そうかい。まあ、ヤーシユの言うことももつともな話だな。それで、団長の所へ連れてきた、というわけだね」

「そういうわけ。で、団長はいるか？」

サクルの不穏な空気など気づいていないヤーシユは、そのまま話を進める。

「ああ。もうみんな見回りから帰ってきてるよ。帰ってきてないのはお前だけだ」

サクルの言葉に、ヤーシユは気まずげに苦笑いを浮かべた。

「あ、そうか。悪い悪い。それじゃ、ただいま戻りましたってことで、中に入らせてもらうよ」

「はい、どうぞ」

ヤーシユが進むと、サクールはドアの横へ体をずらした。ユレイアとカースライドもそれに続いて足を進める。

サクルの脇を通り抜けた時に、ユレイアは先ほどよりも激しい悪寒を感じて、思わずサクルの方を勢いよく向いていた。

「……どうしました、旅の方？」

サクールは、変わらぬ笑顔でユレイアに顔を向けていた。

ユレイアは、視線をそらし、苦笑いを浮かべた。

「いえ、すみません……」

そして、サクールに背を向けた。

ユレイアは、胸の隅に不安を残したまま、小屋の中へと足を進めた。

小屋の中は、外の木造の雰囲気と全く同じであった。

ただ、ベッドと暖房器具、テーブルや台所など、一つの部屋に必要な最低限のものしか置かれていない簡素な造りであった。

この集落に入って、この小屋より大きな家を見ていないので、恐らくどの家屋もこのような作りなのだろう。

部屋のほぼ中央に位置するテーブルに数人が集まっていた。

その人たちはこちらに視線を向ける。

その人々の中心にいた人物も、こちらへと視線を向けた。

ユレイアは、その人物の視線を感じた時に、また違和感を感じた。

先ほどサクールに感じたものとはまた違う。

急に心臓が跳ね上がり、体が熱を持った。

妙に手が汗ばんでいる。

中心にいた人物の様相を、ユレイアは子供の頃に読み聞かせてもらった絵本で見たことがあった。

絵本とは少し違うものの、耳と背中から羽が生えている様は、絵本で翼人と呼ばれていた人々と同じものだった。

その羽は髪の毛と同じ、艶やかな漆黒だった。

ユレイアと合った視線の奥にある瞳も、また高級な陶器のような澄んだ黒だった。

「ヤーシユ、そちらの方達は？」

発せられた声に、ユレイアは我にかえる。

しんと静まり返った部屋に、その声はよく響いた。

黒い瞳の翼人以外は、明らかに警戒した、緊張した面持ちでヤーシユの後ろにいるユレイア達を見ていた。

「ああ、遅れて悪かったよ。アイツらに襲われてるところを助けたんだ。で、この国のことを知りたがってるようだし、ここら辺に一夜を過ごせるような場所もないから連れてきたんだよ。悪いヤツらじゃなさそうだったし」

負の感情を持つ視線には慣れているユレイアだが、やはり慣れていないからといって辛くないわけではない。

しかし、ヤーシユの明るい口調はその場の雰囲気をなごやかにし、ユレイアの不安も和らいだ。

「そうですね。それでしたら、ここ裏にある小屋で休んでいただきますしょう。ちょうど二人部屋で空いていますから」

- Separate the sky - 【4】

「はあ?!」

今まで一言も喋らなかつたカーズライドが声を出した。

皆が一斉に彼の方を見ると、ばつの悪そうな顔をして口をつぐんだ。

「いや、助かった。ありがたく使わせていただく……」

ここでカーズライドが断りでもしたらどうしようかと、ユレイアは心配だつたが、ほつと息をつく。

「それはよかつた。申し遅れましたが、私が彼ら自警団を取りまとめる団長、クレストといいます」

クレストと名乗つた人物は、家の中心にあるテーブルから離れ、ユレイア達に歩み寄り、二人の手を軽く握つた。

「あ、は、はい……! よろしくお願ひします……!」

ユレイアは、クレストに対して妙に緊張してしまつて、うまく視線を合わせることができなかつた。

ユレイア自身、この変化に戸惑つていた。

「お前、何か感じないか?」

部屋に入るなり、カーズライドは言った。

小声であつたが、低く真剣な声だつた。

「何か……?」

ユレイアも、カーズライドと同じような声音で返す。

カーズライドは、これでユレイアも似たような不安を感じていると察したのか、部屋の奥にあつた机の方へ歩き、ユレイアに指し示した。

座れ、ということなのだろう。

ユレイアは言うとおりに机の前にある椅子に座ると、カーズライドはその隣にあるベッドに腰かけた。

「まず、この国自体に何かある、ということ。恐らく過去に何か環境自体を大きく変化させる事件があったと思う。そして気になるのは、サクルとクレストという人物だ。特にサクル。クレストについては、単純に他のヤツらとは違う、何か……特殊な能力を感じるといっただけで、心配する要素ではないんだが、サクルは違う。あいつは何も知らないフリをして、重大な秘密を隠しているような気がする。……全部、俺の推測……いや、勘に近いものではあるんだが……」

カーライドは、今までの彼を見ても思うが、理論的に話を進めた性格なのだろう。だから、非常に嫌そうに眉をひそめて話をしていた。

「私もね、あまり疑うのはよくないとは思うけど、何となくわかるの。その感覚。ずっと、胸騒ぎがおさまらないの。特に、あのサクルっていう人は、とても怖かった……」

「俺も、あまりこういう感覚で事を進めるのは嫌なんだが、何分情報が少ない。警戒していくにこしたことはないだろう。互いの意見が合致したのだから、注意していくぞ」

「わかった」

クレイアは口を引き締め、静かにうなずいた。

「……ところで……」

少しの間の後に、カーライドが言いづらそうに言葉を発した。

いつも堂々としている彼には珍しく、口の中で言葉を転がすようなこもった声で、視線をそらしている。

クレイアは不思議に思い、カーライドを見つめる。

「……クレストを……どう……思ってる……？」

「クレストさん……？」

何でこんな風な態度でそんなことを聞くのだろう、とクレイアは不思議に思って、思わず聞き返してしまった。

「いや、何とかいうか、お前、その、あいつ見た時、なんか、様子が変だったから、どうかしたのかと……気になって、な……」

カーズライドは何か言い訳をしているように、慌てて言った。早口ではあるが、慌てすぎて途中で詰まる。

それを本人もわかつているのか、最後には恥ずかしそうに声が小さくなっていった。

何だかよくわからないが、可愛いなとユレイアは思っ、カーズライドの方へ椅子を近づけて、視線を合わせた。

カーズライドは目が合った時に、口をぎゅっと閉じた。

「私もね、何だかよくわからないんだけど、クレストさんを見た時に、すごい体が熱くなる感じがしたの。なんかすごいドキドキしちゃってね。今まであんまりこういうことなかったんだけど……。あ、でも、王様と聖女様に会った時にも、似たような感じはあった人にごく優しくされた時に感じる気持ち、すごい大きくなった感じ。そう、悪い感じはしなかったから、クレストさんはたぶん悪い人ではないと思うんだけど」

ユレイアは正直に思ったことを言った。

今のカーズライドには、思ったことをそのまま伝えるのがいいと思っただから。

でないと、頭の良い彼は、色々勘ぐってしまう。

「そうか……」

カーズライドは、何やら複雑な表情をした。

気を落としたような、何かを考えているのか。

ユレイアは、何かまた気に障ることを言ってしまったのかと、不安になった。

「どうか、した……？」

カーズライドが一向に視線を合わせてくれないので、触れようとまた近づく。

「なっ……!!」

するとカースライドはひどく驚いたようで、背を大きくそらしてユレイアから離れた。

ユレイアも驚いて、大きく震えて少しカースライドから離れた。

「い、いきなり近づくな……」

カースライドは、恥ずかしそうに片手で顔を触っている。

「ご、ごめんなさい……」

ユレイアは手を引っ込めて、背を縮こまらせた。

「……いや……悪かった……。だがな、お前も、あんまり気安く他人に近づいたりするもんじゃないぞ。だいたい、最初は俺のこと嫌いだっつろう。それぐらいはわかる。それがどうしたって言うんだ」
ユレイアは、何が何だかよくわからないまま、とりあえずカースライドの機嫌を直すには、正直な態度でいるしかない、少しの間で学んだので、思ったことをそのまま言う。

そして、彼女の意地もあった。

カースライドが謝ったのには驚いたが、その後の言葉は、まるで自分が気分屋のように言われているように感じたからだ。

「だって、いきなりあんな風に来たんだから、嫌だと思っるのは自然じゃない。でも、ちゃんと事情を話してもらえたら、理解はできたもの。娼婦館にいたかったっていう気持ちもあるけど、これはこれで楽しいし、私はもともと出身もわからないから、動くことには抵抗はないし。ライドも、こうして話していくうちに、そんなに嫌な人じゃないんだってわかってきたから」

「何で俺が嫌な人じゃないって思う」

カースライドの目が鋭くなった。

ユレイアは、この人を探る目のカースライドだけは怖くて嫌だと思っただ。

が、その気持ちは飲み込んで口を開く。

「だって、さつき私を守ってくれたじゃない」

ユレイアの言葉に、カースライドは目を大きく見開いた。しばらくそのまま時間が流れた。

驚いて、言葉も出ないようだった。

そして、だんだんとカースライドの顔色が変わっていくのがわかった。

カースライド自身も感じたのか、片手で顔の半分を覆い、ユレイアから顔をそらすようと、顔を少しななめに向けた。

「……俺は別に……大したことはしてない。あのヤーシユとかいうヤツがいたから……」

「ライドは私の手をひいてくれたもの。名前を呼んでくれたもの。嬉しかった。嫌な人なら、そんなことしてくれない」

ユレイアは、話しながらその時のことを思い出して、少し顔をほころばせていた。

そう、あの時は怖かったが、カースライドが自分を気遣ってくれたのは嬉しかった。

冷たい態度の彼が、自分のことを認めてくれているんだと感じられたから。

「……まあ、一応お前は俺のパートナーだから……」

カースライドは、他に言うことも見つけれなかったのか、ぶつきらぼうに言った。

「そう、パートナーだからね。そしてね、これもわかってほしいから今言うけど、私にはライドしかないんだからね。今まで一緒にいた娼婦館のみんなとも別れて、一人で出てきて、すぐにライドと二人で旅に出たんだよ。もうあなたしか、私にはいないんだから……」

「私から離れていかないで……お願い……」

何だか、自分で言っていて、ユレイアは泣きそうになっていた。

涙が出そうな顔を見られたくなくて、思わずうつむく。

また、少しの沈黙。

だが、すぐにそつと優しく触れる手を頭に感じた。

「悪かった。俺が悪かった。だから、そんな悲しい顔するな。……どうしたらいいか……困る……」

慣れていないのか、ぎこちない手で、だが壊れ物に触るように撫でる手はとても心地よかった。

「なんか、ライドが優しくてちょっと怖い」

ユレイアは嬉しそうに、カーズライドの空いている手をそつと両手で取って言った。

「……別に俺はお前と喧嘩をしたいわけじゃないからな。だが、お前と俺が安全に旅をするためには、厳しいことも言わなければいけない。それだけのことだ。……それにしても、お前はいちいち触らないと話を進められんのか」

ユレイアが嬉しそうにカーズライドの手を触るのが、彼はとても気になるようだ。

「あ、うん、嫌だったらしないようにするけど、私好きになった人にはどうしても触りたくなる癖があつて。皆にも、たまにそれでうるさがられてたんだけどね」

ユレイアは、少し照れたようにはにかんだ。

いつのまにか、カーズライドはユレイアをなでていた手を離していた。

そして、その手で、カーズライドはまた自分の顔を覆い隠していた。

- Separate the sky - 【5】

「外の様子でも、見てくるか……？」

しばらくの沈黙を破ったのは、カースライドだった。そうして、ぎこちない動作で、ユレイアから離れた。

「……急に外って言うても……どうするの？」

ユレイアは戸惑って、不安げにカースライドを見つめた。

「いくらでも見るところはあるだろう。俺達は、だいたいこの集落がどういう所なのかも知らないんだ。とりあえず、この集落の中を見てまわるぐらいいいだろう。情報がなさすぎる。これでは次にどうしたらいいのか、提示ができない」

カースライドは淡々と話した。

いつものカースライドの話し方だ。

だが、ユレイアの不安そうな表情はそのままだ。

なぜなら、彼が視線をユレイアに向けないからだ。

どこか、カースライドの声の調子にも自信のなさがにじみ出ているのを、彼女が感じていたからだ。

「そうだね。とりあえず動いてみないとね」

しかし、ここで自分もそれにつられていてはいけけない。

ユレイアはそう思って、カースライドの隣に素早く動いた。

そして、手を取る。

カースライドは驚いたように、ユレイアを見た。

だが、すぐに顔をそむけた。

一瞬、触れたカースライドの手が熱くなったように感じた。

「だから、すぐに、触るな、と言っている、だろう！」

「は、はい、ご、ごめんなさい！」

カースライドの動揺した声に、ユレイアは驚いて慌てて手を離れた。
「まったく……」

カーズライドは、ため息をついていた。

「ど、どうしても、ダメ、かな……？」

「……………」

ユレイアの問いに、カーズライドはしばらく黙っていた。

ユレイアは、目だけを動かしてカーズライドを見た。

眉間に皺を寄せて、何を考えているのか、とても気になった。

「誰かがいる場所では控えてくれ。あと、突然触るのもやめろ」

そして、カーズライドはそれだけ言いきった。

「わかりました。気をつけます」

ユレイアは少し納得がいかないものの、これ以上カーズライドの不興をかつてもよくないと思ったので、返事をした。

「それじゃあ、とりあえず自警団に外に出る旨を伝えるからな」

そう言つてカーズライドがドアのノブを回して、扉を開けた途端、慌ただしく騒ぐ声が聞こえてきた。

「おい！ 近くで何か落ちたぞ！」

「ひどい揺れだったぞ！ 何が落ちたんだ？！」

「みんな無事か！ 何かないか？！」

「落ちたのはどっちの方だ！ すぐ部隊を作つて様子を見に行くぞ！」

とりあえず部屋の外へ出て、聞こえてくる会話を聞いていたユレイアとカーズライドであったが、落ち着いていそうなクレストに声をかけてみることにした。

クレストとも視線が合った。二人に気づいたようだ。

「これはお客人。騒々しくてすみません」

嫌味のない笑顔で、クレストはそう言った。

「どうかしたんですか？」

クレストは、ユレイア達の問いを受けて、一瞬をためらうように視線をそらしたが、すぐに二人を見て言った。

「近くで、何か大きなものが落ちた音がしたんです。今はそれしか
言えません。何だかこの周りの空気にも違和感を感じるのですが…
…それも定かではないので」

「今、部隊を作って様子を見に行く、とおっしゃってましたよね？」
カーズライドが、珍しく丁寧な言葉遣いで質問した。

だが、そこから会話を自分の思う方向へ導こうとする鋭さがあった。
「ええ」

クレストもそれを察知したのか、少し表情を強張らせる。

「俺達も、それに同行させてください」

カーズライドの言葉に、クレストは表情を引き締めた。

その彼の表情は、先ほどの温和な笑顔とはまた打って違って、こち
らの心も凍らすような厳しいものだった。

しかし、カーズライドもそれには負けない。

「お願いします。宿泊の恩まであって、凶々しいとは存じますが、
どうかご同行させてください。私達の旅の目的は、旅で訪れた国の
ことを調べるためなんです」

「……………」
あながち間違っていない。

明確な目的ははっきりとしていないものの、国王候補の王子とその
パートナーである聖女が成長するために、訪れる国々で何か問題が
あれば解決し、また見聞を広めていくことが、この旅の目的である。
そういう意味では、カーズライドの態度は誠実であった。

ユレイアは、こういうまっすぐなカーズライドの態度にはとても好
感を持っていた。

クレストは、逡巡するように、少しの間視線を彷徨させたが、すぐ
にカーズライドに視線を戻す。

「……わかりました。ただし、こちらがあなた方の身を完全に守り
きれる保障はできません」

「もちろんです。こちらもできる限りご迷惑をおかけしないようい
たします」

「では、すぐに出発しますので、ついてきてください」

クレストはそう言うと、素早い足取りで扉へと動いた。

動作に無駄がなく、物音は空気を切る音だけだった。

カーライドも、ユレイアの方へ視線を向けて、くいと扉の方へ首
を動かした。

行くぞ、の合図だ。

ユレイアは、静かにうなずいた。

カーライドについて、外へ出て行こうとしたユレイアは、背筋に
激しい悪寒を感じた。

驚いて振り向くと、そこにはサクールがいた。

ユレイアは、一瞬サクールと視線が合った気がした。

だが、すぐにサクールは目を細めて、その瞳は見えなくなってしま
った。

ユレイアは、一瞬どうしたらいいかわからず、その場に固まってし
まった。

「どうした、ユレイア」

だが、カーライドがすぐにユレイアに声をかけ、ユレイアはその
声につられて、慌てて外へ出た。

あの感じは何だったのだろうか。

ユレイアの胸に、また一つ不安が積もる。

やはり団員達の不審そうな目は痛かったが、気にはしていられない。
特に不満の声も上がらなかつたのは幸いだった。

集落から歩いて三十分ほどで、前の方に黒い影が見えた。

森にあるには不自然な、大きくて丸い影だった。

近寄ってみると、ますます森にあるには不自然な、無機質な輝きを帯びた物体がそこにはあった。

その物体の周りだけ、落ちた時の衝撃か、森を覆うようにある木々が場所を空けていた。

団員達は、その物体から三メートルほど離れて、立ち止まった。

そして、そのまま沈黙が続く。

団長自身も、どうしようかと考えあぐねているようだ。

すると、丸い物体の一部分が金属の重くぶつかる音がかすかにした。次の瞬間には、丸い部分の一部が四角く切り取られ、前に倒れた。

「もう、あなたに操縦任すといつもこれなんだから！ 何回機械

壊したら気が済むの！」

「ごめんなさい。どうも実践は苦手で……」

そしてその切り取られた奥から、声を荒げた女性と、苦笑いを浮かべた青年の二人が出てきた。

向こうもこちらに気づき、口をつぐんで立ち止まる。

こちら側と言えば、先ほどと全く同じ姿勢で、立っていることしかできなかった。

「それより、クレア、皆さんにご挨拶しないと」

銅の色をした長い髪を後ろでくくった青年が、金糸のような肩まで伸びた少女に優しく指し示す。

クレアと呼ばれた少女は青年が示す方に軽く首をひねり、視線を向けた。

そこで気づき、慌てて体をユレイア達に向けた。

「え、ちよっと、そういうことは早く言いなさいよ！ あ……えーっと……すみません、お騒がせしてしまって……私達、その……怪

しい者ではないんですよ……ええ……」

クレアは、必死で取り繕おうと笑顔を浮かべている。

「って言っても、信用できませんよねえ」

しかし、隣にいる青年は全く動じていない笑顔で、クレアの言葉を否定した。

「ちよつと！ どうしてあんたはいつもそういうこと……アハハハ……」

隣にいる青年に少女は責める言葉を言おうとするが、皆の視線に気づいて、慌てて苦笑いを浮かべる。

ユレイアは、どうやら悪い人ではなさそうだと思ったのだが、団員の人達は警戒をとかない。

それはそうだろう。どのような人物であっても、結局得体の知れない者には違いない。

自分達も、そうなのだから。

だが、ユレイアは少し期待をしていた。

団員達の先頭立つクレストは、一歩前に出た。

クレアと青年はそれに気付いき、真剣な表情でクレストと向かい合う。

「まずは、落ちついた場所で話しましょうか。あなた方を完全に信頼することは、残念ながらできませんが、この国は、見ていただければわかりますが、あまり豊かとは言えません。周りにいる者達が助け合っていかなければならないのです。まずは、私達と共に来てくださいますか？」

そうして、ユレイア達は、ひとまず集落に戻った。

「先ほどは失礼いたしました。それから、お騒がせしたことも申し訳ありません。あの機械は、そのうち持っていくしますので、ご心配には及びません」

「自己紹介させていただきますと、まず、僕がレイズと申します。

こちらの女性がクレアです。僕らは、様々な場所を旅して、その場所の情報を集めて記録していくことを仕事としております。ここへもその仕事で来ました。見たところ、周りに人がいる気配もないので、差支えございませんでしたら、こちらにお世話になりたいのですが……」

「ちょ、ちよつと、あんた……」

クレアの後に、青年レイズが喋りだし、クレアは慌てて、レイズの肩をつかむ。

「話が早くていいですね。こちらあまり部屋があるわけではないので、お二人で一室ということになりますが、要望にはできる限り応えましょう。ただ、我々はあくまで協力をし合う、ということをお願いしますね」

「ええ、もちろんです。感謝いたします」

クレストもレイズも笑顔であるが、この二人の笑顔には底知れぬ迫力があるな、とユレイアは傍らで見ている感じていた。

何だか、この国は腹に一物も二物も抱えたような人が多いようだ。ユレイアは別な不安を感じて、ついカーズライドを見てしまった。それに気づいたのか、カーズライドもユレイアを見る。

視線が合うと、カーズライドは軽く肩をすくめて、首をかしげた。どうやら、思っていることは一緒のようだ。

- Separate the sky - 【6】

「外に出損ねたな」

何だかんだしている間に日が暮れてしまい、また自室に戻ってきたカースライドとユレイアの二人。

カースライドは後ろ手に扉を閉め、ため息混じりにそう言った。

「そうだね……」

ユレイアはベッドに腰をかけた。

座れるような場所がそこにしかないからだ。

「とりあえず、今日のところは、この集落に着けたことが収穫ってことにしましょう。焦ってもしょうがないし」

「……そうだな」

ユレイアが笑顔で言うと、カースライドは軽く肩をすくめて、自分も空いているベッドに腰をかけた。

ユレイアと方を向いて座る。

「……ねえ、ライド……なんか、遠いね……」

「……は？」

ユレイアが急に呟いた一言の意味がわからず、カースライドはつい眉をしかめてユレイアを見た。

「あ、ええと……その……なんか、ベッド遠いな、と思って……」

「?……別にこれぐらいじゃないのか？」

やはりカースライドは訳がわからない。

「だって、ほら、手、届かない……」

ユレイアはカースライドの方を向いて、両手を伸ばす。

「別に手が届く必要は、ないだろう？」

カースライドは首をかしげてしまった。

「……不安だから、ライドが側にいることがわかってほしいの……」

ユレイアは、ひどく言いにくそうに声を振り絞った。
少し頬を赤らめて、カーズライドを軽く睨む。
カーズライドは、そこで何を言われているのかやっと思ついたよう
だ。
一気に彼の顔や首が赤くなる。

「な……！……そ、そんなことを言つたつて……どうしろ、と……」
手が所在なさげに意味のない動きをしている。

「ベッドをくつつけさせて？ 出る時に元に戻せばいいと思つたの。
ね？」

ユレイアは、こういう時のお願いの仕方は心得ていた。
両手を組んで、小首をかしげる。

カーズライドは、軽く音をたてて、自分の目を覆った。

そして、背中を丸めて、しばらく黙った。

ユレイアは不安そうにカーズライドを見つめる。

「……わかつたから、そんな目で見るな。……つたく、世話のかか
るヤツだな……」

カーズライドは大きいため息をついて、ベッドから立ち上がる。

そして、ベッドの間にあつた小さなチェストをどかせようとした。

「あ、私も手伝う！」

ユレイアもカーズライドも立ち上がる。

声は弾むよううで、嬉しさがにじみ出していた。

チェストをベッドの間から出したカーズライドは、そのユレイアに
声をかけた。

「それじゃあ、こつちのベッドを動かすから、そちら側を持ってく
れ。大丈夫か？」

「大丈夫よ！ それぐらいは鍛えられてるんだから！」

そして、ベッドの隙間は埋められた。

チェストはとりあえずカーズライド側に置いた。

ユレイアの側には、机があるためだ。

「これで、よし」

ユレイアは満足そうだ。

カースライドは、いまいち納得のいかない顔をしている。

ユレイアもそれに気づき、不安そうにカースライドを見上げた。

「嫌だったかな……やっぱり……」

ユレイアの声に、カースライドは慌てて大きく手を振った。

「いや、違う違う。そういうことじゃないんだ。気にしないでくれ。

まあ、またここを出て行く時には戻すからな。またその時は頼むぞ」

カースライドは、そう言うと、優しくユレイアの頭をたたいた。

と、カースライドは自分のしたことに驚いたように、慌てて手を引つ込めた。

ユレイアも驚いてカースライドを見たが

「んふふ……」

嬉しそうに叩かれた頭の部分をなでた。

「嬉しい。カースライドってどこか人を遠ざけてる感じがしたから。

こうしてくれると、こっちも触っていいんだなって思えるし」

「……………」

カースライドは、顔を赤くして口を引き結んでいた。

何かをこらえているような表情にも見える。

「……俺が触れられるのも、またそうしたいと思うのも、お前だけだ」

そう言うと、カースライドはユレイアの横髪を一房つかんだ。

優しくつかんだ髪に繰り返し触れる。

それを見つめる目は、どこか熱っぽい。

「ラ、ライド……?」

ユレイアが戸惑って、カースライドを見上げ、二人の視線が絡まった時。

「ご飯できたぜー！」

ヤーシユが勢いよく部屋のドアを開けた。

その瞬間、カースライドは素早くユレイアから離れた。

そして、何でもなかったようにヤーシユを見る。

いや、やや睨んでいたかもしれない。

ヤーシユが思わず一歩引くぐらいには。

「ノックぐらいしろ」

「お、おお、悪かった。ご飯できたぜ。さっさと食べないとなくなっちゃうぞ」

しかし、カースライドの声の調子もいつもどおりだったので、ヤーシユは気にせず、笑顔に戻って用件を伝えた。

「わかった。今行く。ユレイア、行くぞ」

そう言うと、カースライドはヤーシユの後について、出て行く。

ユレイアは慌てて二人の後についていた。

夕食は、入口から入ってすぐのあの団員が集まっている場所だった。簡素ではあったが、主食、汁物、副菜がきちんと揃っていた。

「あの、お伺いしたいことがあるんですが……」

食事の最中に、レイズが口を開いた。

その声に、皆は顔だけをレイズに向ける。

隣に座るクレアは、緊張した面持ちだ。

レイズはそれを確認してから、また口を開く。

「僕は、この国が空中都市と聞いてやってきました。その都市のことを知っていますか？」

途端、団員の空気が凍った。

特に、クレストとサクルの表情が険しくなった。

「……それを聞いて、あなた方はどうされるのですか？」

クレストが、険しい表情のまま聞く。

レイズも、同じように表情を険しくした。

彼にもひけない事情があるようだ。

「その空中都市について調べたいのです。先にも言いましたが、私達はその国々のことについて調べて旅をしています。空中に都市を作ったその技術がいかなるものなのか知りたいのです」

「……………」

皆が一様に押し黙る。

カーズライドとユレイアも、何かこの国のことについて引き出せるのではないかと、会話のなりゆきを見守っていた。

「お願いします。私達、ただ好奇心だけでこういうことをしているわけではありません。この国に、それによって災いが起きているという話も聞いてきたのです。この国を助けるお力にもなりたいと思っています。何か知っていらっしゃるのであれば、どうかお教えいただきたいのです」

黙っていたクレアが、最後の一押しとばかりに言う。

「恐らく、ユレイアさんとカーズライドさんも、同じ目的なのではないのでしょうかね」

クレストがため息混じりに、ユレイアとカーズライドの二人にも視線を向けた。

急に話をふられて、二人は一瞬固まるものの、ゆっくりとうなずいた。

「正直に言えば、同じようなことです。ただ、私達はこの国の問題を解決することの方に重きを置いています。その問題を解決することによって、私達のこれからが示されるからです」

いつもの事務口調でカーズライドが言う。

「…………… わかりました。同じ目的を持つ方々が、こうしていらつしゃったのも何かの縁。あなた方の力をお借りしたいと思えます。確かに、レイズさんのおっしゃる通り、この国には空中都市というものがあり、それを中心にして動いていました。ただ、それについては、また明日お話することにしませう。今日はもう遅いですし。そして、口で言うより、実際に見た方がいいでしょう。明日は、早朝に出ます。今日は早めにお休みください」

クレストはそれだけ言うと、口を閉じた。

これでお開きだ、ということなのだろう。

「ありがとうございます。ご飯、おいしかったです。ごちそうさまでした」

それぞれ食事終了の挨拶を済ませると、部屋に戻っていった。

ユレイアとカーズライドも、自室に引き上げる。

ユレイアはベッドに腰をおろして、軽く息をついた。

「疲れただろう。今日は早く寝ろ」

それに気付いたカーズライドは、ユレイアに声をかけた。

「う、うん……………でも……………その……………」

「?」

何かを言いにくそうにしているユレイアを、カーズライドは怪訝な顔で見た。

「お風呂に入ることではできないのかな、って……………」

「……………あぁ……………」

カーズライドは、失念していた、という風に顎に手を当てた。

「それなら、向こうのクレアとかいう女性も気にしているのではないか。ちょうど目的も一緒のようだし、顔見知りになっておいて損はないだろう。俺も、あのレイズというヤツが気になっていたところ

るだし。行くか？ 一人で聞きにくいことも、誰かとなら聞きに行けるだろう」

「あ、そ、そうだね。ありがとう、ライド」

ユレイアは戸惑いつつ、カースライドのさりげない心遣いがやはり嬉しかった。

思わず顔をほころばせる。

カースライドは、珍しいものでも見るように、一瞬ユレイアへ視線を向けたが、すぐに顔をそらした。

そう、カースライドは何でもない態度をとっているが、それがかえって不自然だった。

ユレイアはそれに気づいていた。

それが不安で、無意識にユレイアは立ち上がるのと同時に、カースライドの服の裾をつかんだ。

カースライドはわかるほどに大きく震えて、ユレイアから離れた。

「ど、どうした……！」

「ライド、何だか私に対して様子が変わだから……どうしたのかな、って……」

「……ああ……別に、お前が気にすることじゃない。不安にさせてるのならすまない。気をつける」

「……」

カースライドの声音は優しかった。

だが、やはり先ほどのようには触れてくれないのだな、とユレイアは感じた。

しかし、ユレイアはそれ以上は何も言わず、うなずいた。

「明日も早い。用は早く済ませるぞ」

そう言うと、カースライドは部屋の扉を開けて外へ出た。

ユレイアもそれについて出ていった。

扉を軽く叩くと、奥から「どうぞ」という声が聞こえ、ドアを開けた。

中には、レイズとクレアの二人がいた。

「あれ、どうしました？」

レイズは人好きのする笑顔で二人を迎えた。

クレアは少し驚いたように目をみはって、二人を見た。

「夜分に失礼します。ユレイアが風呂に入りたいと言うので、クレストに聞いてこようと思うのだが、その前にあなた方はどうするか聞こうと思ひまして。よければ、ユレイアと一緒に行っていただきたいと存じます」

カースライドは、顔を作る時必要以上に言葉が丁寧になる。

ユレイアは、それを聞いたたびに、複雑な気持ちになっていた。

「そういえばそうね！ ちょうどよかったです。ユレイアさん、ぜひ一緒に行つて、クレストさんに聞いてみましょう」

クレアが嬉しそうに手を合わせて、椅子から立ち上がった。

そして、すぐにユレイアの手を取り、部屋の外へと出て行った。

少し小走り気味に廊下を行くと、すぐに居間に着いた。

そして、そこにはクレストが一人でテーブルに座り、書き物をしていた。

二人の気配に気づいたのか、顔をあげて視線を向けた。

ユレイアは思わず固まった。

やはりクレストを見ると、落ちつかない気分になる。

クレストが持つ独特のオーラに気おされてしまう。

「どうしました？」

クレストは、優しいな笑みを浮かべた。

思えば、常に落ちついた雰囲気を持つているが、クレストが穏やかな表情を見せたのはこれが初めてかもしれない。

「あの、お風呂お借りしてもいいですか？」

クレストは、一瞬何のことだろうという顔をしたが、すぐに理解したようで、また笑顔になった。

「ああ、そうですね。私としたことが、忘れていました。浴場は廊下の一番突きあたりにあります。鍵もかかりますから、鍵をかけて入ってください。たぶん入浴中という看板もありますから、誰かが入っていればわかりますし」

「ありがとうございます。それじゃあ、使わせていただきますね」
クレアは笑顔で言うと、ユレイアと共に居間を後にした。

- Separate the sky - 【7】

居間を出て、少し歩くと、クレアは軽く息をついた。

「あー、なんかあの人と面と向かうと緊張するなー」

「でも、すごいですね。私は全然喋れなかったです」

「だって、喋らないと話進まないじゃん」

クレアは苦笑いを浮かべた。

「あと、他人行儀みたいな話し方するのやめましょう。私達とあなた達はどっちもこの国の人にとってはよそ者なんだもの。ここは協力しないといけないと思うの。その第一歩として、態度から入らないと。というわけで、私とあなたはこれから仲間よ。だから、そういう気持ちで話してほしいの」

クレアはそう一気に言った。

78

ユレイアは、クレアをどこか娼婦館のリクスと重ねていた。思い切りのよさ、表情がころころ変わる明るさと愛らしさ。ユレイアの憧れる女性と、外見こそ違うものの、持つ空気がクレアはどこか似ていた。

そのクレアからの言葉は、ユレイアを素直に嬉しくさせた。自然と笑みが出る。

「ありがとう。こちらこそ、よろしくね」

クレアは、笑みをさらに深めた。

「ああ、やっぱり可愛いなー、ユレイアは」

「え？」

「あ、呼び捨てでいいかな？ 私のことはクレアでいいからね」

「あ、え、うん。いや、それより……」

「ん？ ああ、なんかね、最初見た時から思ってたんだ。なんかこう守ってあげたくなる感じ」

「んー……」

クレアが喜々として語るのを、ユレイアはよくわからない、というように眉を寄せた。

「って言うと、だいたいそういう子は嫌がるんだよね。世の中ってうまくできてないよね。それを持っている人は、違う要素を求めてるんだものね」

クレアは困ったような笑みを浮かべていた。

「……それはたぶん、一緒にいる人に影響されてるのかな、と私は思うんだけど……」

「え……」

ユレイアが小さく呟いた言葉に、クレアは思わず黙ってしまった。

「戻ったか」

ユレイア達が部屋の扉を開けると、数刻前と同じようにカーズライド達がいた。

ユレイア達に気づくと、カーズライドはユレイアに近づく。

「行くぞ」

言うと、カーズライドはユレイアの横を抜けて、部屋を出ていってしまった。

「あ……それじゃあ、ありがとうございました。おやすみなさい！」
ユレイアも、慌ててカーズライドを追いかけて部屋を出た。

「ラ、ライド……！」

先に行くカーズライドに追いついた時には、すでに二人は自分達の部屋に戻っていた。

お湯から出て熱くなっていたユレイアの体は、小走りのためにさらに熱くなり、やや息があがっていた。

「そんなにすぐ出て行くことないじゃない。もう少しぐらいお話し
ていけばよかったのに。せっかく仲良くできそうなのに……」

「……………」
カーズライドはユレイアの言葉が耳にはいつていないのか、目の前
のベッドに腰をかけ、頬杖をついて、床を見つめた。

「……………？」

ユレイアはカーズライドの様子を不審に思い、口を閉じた。
少し歩を進めて、声を落としてカーズライドを呼んだ。

「ライド……何か、あったの？」

「……………」

しかし、カーズライドは微動だにしない。

ユレイアは、少し眉根を寄せた。

ゆっくりとカーズライドに近づき、彼の目の前に正座をした。

こんなに至近距離に動いたのに、彼は何も反応を示さない。

ユレイアはますます眉間に皺を寄せ、口をへの字に曲げた。

「ライド！」

我慢できず、大声をあげてユレイアはカーズライドを呼んだ。

「……！」

これにはさすがにカーズライドも驚いて、頬杖をといて思わず周り
を見回していた。

そして、ユレイアの姿をみとめる。

「……………ど、どうした……ユレイア……………」

ユレイアがいつになく厳しい顔をしているので、カーズライドはた
じろいだ。

ユレイアには言いたいことはたくさんあって、しばらく睨みつけて
いたが、何だかそれも馬鹿らしくなった。

気を取り直して聞きたいことだけを聞くことにした。

「レイズさんと、何かあったの？」

「……………」

カースライドはまた黙る。

二人の視線が合わさり、しばらく時間が止まる。

「…………… あいつは、油断ならぬヤツだ。お前がどう思っているかは知らないが、俺はあいつが信用できない。仲間に引き込めるなら、心強いと思うが、あいつが何を考えているかわからない以上、完全に信頼することはできない」

「……………」

答えになっていない。

ユレイアはそう思って、静かにカースライドを見つめていた。

カースライドも、そのユレイアの視線を感じ取ったのか、気まづげに視線をそらしてしまった。

ユレイアは、小さくため息を吐く。

「でも、クレアは信頼できる。これだけは言える。信用できないのはしょうがないけど、彼らに対してあまり冷たい態度を取らないで」

「……………」

ユレイアはきつぱりと言い切った。

カースライドも、ユレイアを見つめ、その言葉を無言で受け止める。そこで、ふとユレイアは表情を和らげた。

「…………… でないと…………… ライドまた辛くなるよ？ 悔しいけど、私だけじゃライドを支えきれない。ライドはそんなつもりないかもしれないけど、私だって一緒に旅してるんだから、目の前にある問題は二人で協力して解決していきたい。ライドだけに大変な思いをさせたくない。そのためには、誰かの助けを借りていかなきゃいけないんだよ」

カースライドの表情が、少し揺れた。

ユレイアは、カースライドの右手を両手で包み込み、額をそっと触れさせた。

「そんなこと言われなくなつて、人と協力することは重要だつて、国を支えてきたあなたならわかつてると思う。けど、この旅では、その協力の仕方、場所にあわせて変えていかないといけないっていうことに、あなたは気づいていない。あなたは少し強情なところがあるから。だから、お願いするの。私からのお願い。どうか……」

「わかつた」

ユレイアの言葉を途中で遮るように、カースライドがはつきりとした声で言った。

そして、そつと彼女の頭に手をのせた。

「わかつたから……」

最後は、どこか懇願するような悲しげな声のように聞こえた。

「なら、いい」

ユレイアは満足げに微笑んで、カースライドの膝に擦り寄つた。

カースライドは、大きく震える。

「ユ、ユレイア……そんな所にいたら冷える。もうベッドで休め」

カースライドは、恐る恐るユレイアの両肩に手を置く。

「んー、何だか気持ちよくて動きたくないな……」

ユレイアはさらにカースライドにすり寄る。

カースライドの膝上に頭をのせ、よりかかった。

「……………！」

カースライドは、固まつた。

しばらくその状態が続く、カースライドは所在なさに、周りを見回したり、小さく動いてみたりしている。

やがて、何か覚悟したように、ユレイアを見た。

「ユレイア、寝ろ」

カーズライドはそう言うと、ユレイアの腰に腕を回し、彼女を抱え上げた。

ユレイアは驚いて目を大きく見開くが、カーズライドにとりあえず身を任せる。

カーズライドはそのままユレイアを運び、隣のベッドにゆっくりとおろす。

ゆっくりと、カーズライドはユレイアから離れる。

その時、からまった視線が一瞬熱く感じたのは、気のせいだったろうか。

カーズライドはすぐに視線をそらしてしまったので、ユレイアにはわからなかった。

体温が離れてしまうのが寂しくて、カーズライドの離れていく袖を思わずつかんでいた。

だが、カーズライドの表情に動揺の色が浮かんだので、ユレイアはすぐ手を離れた。

そんな頼りない表情をカーズライドが見せたことはなかったからだ。ユレイアも、思わず表情にシヨツクの色が浮かんだのが自分でもわかった。

カーズライドがそれをわからないわけがない。

一瞬、動作を止めて、淡く笑みを浮かべ、ユレイアの髪にそっと手を滑らせた。

ユレイアは、カーズライドのその笑みを知っている。

カーズライドがわざとらしいほど丁寧な態度を示す時に見せる笑顔に、とてもよく似ている。

ただ、いつもよりどこかぎこちなくて、無理をしているようにも見えた。

「…………ごめんなさい…………」

自分が無理をさせてるんだと感じたユレイアは、思わずそう言って

いた。

カーライドは、今度は動揺の色を濃くした。
しかし、何も言葉を発することができなかった。

「おやすみなさい……」

ユレイアは、そのまま目を閉じた。

カーライドは、そっと布団をかけて、ユレイアから離れた。
自分のベッドに腰をかける。

そして、おもむろに横の机の引き出しから紙とペンを取り出すと、
勢いよく手を動かし始めた。

彼はそうしてずっと夜を過ごした。

- Separate the sky - 【8】

眼裏をさす光に刺激され、ユレイアは目を開けた。
ゆっくりと起き上がると、視線は自然と隣のベッドへいつていた。

「……………」

ユレイアは首を少しかしげた。

視線を向けたが、カーズライドが寝ているはずであるベッドに、彼の姿はなかった。

胸がざわつく感じを覚え、ユレイアは慌ててベッドから出た。

支度を済ませると、皆が集まる居間へ行く。

居間にはサクールがいた。

「おはようございます」

サクールはユレイアと目が合うと、そう言って軽く会釈した。

自警団の人達は、毎時間居間に残る人を交代で決めている。

ちょうど今の時間がサクールだったのだろう。

「お、おはようございます」

ユレイアも会釈を返す。

彼の元々の顔なのか、いつも笑っているようには見えるが、どうも本心からの表情とは思えず、ユレイアはいつもサクールを見るたびに、底冷えるような感覚を覚えていた。

そのせいで何となく彼を苦手に思っていた。

ユレイアはとりあえずこの場から離れようと、外に出ようと玄関へ向かう。

「カーズライドさんなら、少し前に何か深刻そうな顔をして出て行きましたよ」

その言葉に、ユレイアはサクールの勢いよく振り返る。

ユレイアと視線が合うと、サクールは細い目を余計に細めた。
「空が明るみ始めたばかりでしたので、1時間前ほどでしょう。戻られたのは見ておりません」
サクルールの言葉に、ユレイアはますます胸がざわつくのを感じた。その言葉に何も言うことができず、ただ黙って玄関から走って外に出て行った。

サクールはその姿を表情を変えずに見ていた。

扉を出てすぐ、ユレイアは辺りを見回した。

数時間戻っていないのなら、遠くにいるのかもしれないが、手がかりのない自分には、ただ辺りを見回して探していくことしかできない。

集落の中は一通り見たが、カースライドの姿が見当たらない。もしかしたらすれ違ってしまっただろうか。

そう考えもしたが、ユレイアにはまた別な考えがあり、それが胸をざわつかせていた。

集落の外に出ているのではないだろうか。

外で、先ほどの化け物に遭遇していたら。

ユレイアはいてもたってもいられず、集落の外に出た。

また辺りを見回しながら動く。

だが、武器を持っていないので、集落からなるべく離れないようにはしていた。

「ユレイア！」

声が聞こえて、そちらを振り返る。

「ライド！」

すぐ目に入ったのは、探していた人物だったが、その間に影が映った。

次の瞬間、ユレイアの体に衝撃が伝わる。力強く腰をつかまれ、引つ張られる感覚。空気が勢いよく肌にあたった。

速度が遅くなり、とまると、何かに包まれた。湿っぽく、緑の匂いが濃くなった。

見ると、人の腕に抱かれているようだが、その腕は木のような木目がある濃い緑色。

それに見覚えがあり、ユレイアは体をひねり、腕の元を見上げた。そして、ユレイアは声を出せなくなった。

予想していたとはいえ、やはり間近で見ると驚いてしまう。

そこにいたのは、先ほど自分達を襲った人型の化け物だった。ギョロリと稲妻色に光る目が、ユレイアと合った。

ユレイアは、その目に見据えられ、動けなくなってしまった。

「ユレイア！」

再度自分を呼ぶ声に、ユレイアは我にかえり、声の方を向く。

「ライド……」

ユレイアの顔は強張り、うまく口が動かなかった。

カーライドは腰の剣に手をかけ、相手の出方がわからず、イライラしているようだ。

しばらく膠着状態が続くかに思われたが、少しの沈黙の後、頭上の木が揺れたかと思うと、ユレイアを捕まえていた化け物が激しい叫び声をあげた。

叫び声の後、ユレイアを拘束していた力が緩み、ユレイアは思わずその場に座り込んだ。

「ユレイア！」

ライドが駆け寄る前に、そのユレイアを支える手。羽を抱くように、優しくユレイアを支えた。

ユレイアがその腕につかまり、元の人物を確認する。

黒髪から白い羽が見える、見覚えのある人物がそこにいた。

「クレスト、さん……?」

確認するように、ユレイアはつぶやいた。

「大丈夫か」

クレストの問いに、ユレイアはうなずいた。

「そうか……」

クレストは言うど、駆け寄っていたカーズライドにユレイアを預けた。

カーズライドは慌ててユレイアを支える。

その手は、クレストとは違って、ぎこちなかった。

しかし、不思議と大きく包み込んでくれる安心感があった。

「気をつけないと、いけませんよ」

クレストは落ち着いた静かな声で言った。

その顔は、声に似合わず、真剣であった。

視線をずらしたので、それは二人に向けられた言葉のようだった。

それだけ言うと、クレストは森の中へ行こうとする。

ユレイアは、ふと疑問に思ったことがあったが、それは口に出せなかった。

「待て」

カーズライドが声を出したことで、ユレイアはタイミングを逃したからだ。

そして、ユレイアを支える手にも力をこめる。

カーズライドに引き寄せられる形となったユレイアは、何だか妙に落ち着かない気持ちになっていた。

クレストは向けていた背をまた戻し、カーズライドに顔を向けた。

「……私に、戦い方を教えてほしい……!」

ひどく苦しそうな声で彼は言った。

ブライドが高いカースライドのことだ。

きっとこの言葉はそれらを押しつぶして出しているのだろう。

何だか、その声を聞くと、ユレイアも胸を押しつぶされる気持ちになり、口をきつく結んだ。

「……わかりました。それでは夕食後にすることにしましょう。よろしいですか？」

クレストの口の端がやや上がる。

しかしそれは、微笑んでいるというよりは、挑んでいるような表情だった。

「ああ……よろしく頼む……」

カースライドも、何とか声を搾り出すようにして答えた。

「もう少ししたら朝食ができますから、帰ってきてくださいね」

しかしそう言うクレストは、団員の詰所に戻るのではなく、森の中へ消えていった。

カースライドは、それをじっと見据えていた。

しばらくして、耐えられなくなったユレイアは声をかけた。

「ラ、ライド……！」

カースライドは、そこで気づき、ユレイアを見る。

そして、その視線の近さに我に返り、慌ててユレイアから離れた。

ユレイアもさすがに立てるようになっていたので、そのままカースライドと向かい合う形になる。

「す、すまない……気づかなかった……」

カースライドは顔を真っ赤にして、ユレイアと目を合わせずにいた。何となく、ユレイアは離れたのを残念に思いながら、そういうカースライドを可愛らしく思い、優しく笑んでいた。

「ううん。ライド来てくれて、嬉しかったよ。ありがとう」

「……何もできなかったがな……」
自嘲を含んだ笑みと声。

ユレイアは少し寂しくなった。

なぜ彼はこんな表情をしなければならぬのだろう、と。

「私は！」

ユレイアは、思わずカースライドの両手をつかむ。

カースライドは驚いてユレイアを見た。

「ライドが来てくれただけでも嬉しかったの！ 安心できたの！」

ユレイアは、じっとカースライドを見つめた。

カースライドは、一瞬驚いて戸惑った表情をしていたが、やがてユレイアをじっと見つめ、笑みを浮かべた。

「ありがとう。ユレイア。お前が無事で、よかった」

そう言うと、カースライドは片手でユレイアの髪をなでた。

その感触が心地よくて、ユレイアはさらに顔を緩めた。

その手に、少し頭をすり寄せる。

すると、カースライドの手が止まった。

ユレイアは、どうしたのかとカースライドを見た。

カースライドは、手を戻して、その手を開いたり閉じたりしながら見ている。

「ライド？」

ユレイアは首をかしげてライドを見た。

カースライドもそれに気づいて、慌てたように言う。

「も、もう朝食の時間だな。戻るか、ユレイア」

そう言うと、カースライドは歩き始めた。

「あ、うん……」

ユレイアもその後について集落に戻った。

自警団の詰所に戻ると、皆テーブルを囲んでいた。

慌ててカースライドとユレイアも席につく。

ふと目の前のクレアと、ユレイアは視線が合った。

クレアは、片目をゆっくり閉じて開ける動作をした。

ユレイアは意味がわからなかったが、恐らく何か話があるのだろう

と思い、うなずいておいた。

食事を終えて、ユレイアとカーズライドが立ち上がる。

「ユレイア」

「カーズライドさん」

二人にかけられる声がそれぞれの方向からした。

二人はそれぞれ呼びかけられた方を向く。

ユレイアが向いた方には、クレアとレイズがいた。

カーズライドが向いた方には、クレストがいた。

「稽古をつけて欲しいと言っていたでしょう。さっそくいかがですか？」

「ちよつと外でお話したいんだけど、いいかな？」

それぞれ言っていることは別だったが、仕草は同じように外を指さしていた。

ユレイアとカーズライドは、思わずお互いに視線を向けていた。

目が合うと、何となく気恥ずかしくなり、慌てて視線をそらしてしまった。

「あ、じゃあ、私行くね。ライドも、頑張つて」

「ああ。気をつけて、な」

「うん」

ユレイアとカーズライドはそう言うと、それぞれ呼ばれた方へ歩き出す。

「すみません、私も一緒にご同行してよろしいでしょうか？」

ユレイアはまた背筋に寒気を感じた。

ユレイア達に声をかけてきたのは、サクールだった。

この人のまとう空気感は何なのだろう。急に寒々しくなる。

ユレイアはクレアとレイズに視線を向ける。

「ええ、構いませんよ。ご一緒していただければなら、むしろありがたいです。集落の外に出向こうと思っただけなので」

「そうですか。それならなおのことですね」

細い目の奥に鋭い光が見えるような気が、ユレイアにはしていた。

「おい」

カースライドはレイズの言葉を聞きつけたのか、目を据わらせて近づいてきた。

そしてレイズに近寄り、低い声で言った。

「ユレイアを危険な目に合わせるんじゃないぞ」

「なら、カースライド君もご一緒しますか？」

カースライドは、レイズが笑顔で返す言葉に、唇を引き結んで睨みつけた。

ひどく傷つけられたような顔をしている。

「それでは、実践を兼ねた方がいいでしょうか。そちらの方が早いかもしれませんね」

そこへクレストが声をかけた。

カースライドは驚いてクレストを見る。

クレストは、レイズとはまた違う優しい笑顔を浮かべていた。

カースライドは、何となく気恥ずかしくなったのか、体の向きはそのままだに、顔を赤らめて少し視線をそらした。

ユレイアは、カースライドのその態度を見た瞬間に、何だか胸の奥で重い塊がのしかかるような感覚を覚えた。

思わず、胸の辺りで拳を握る。

「できれば……そう願いたい……」

小さく言った。

「では、決まりですね。少し大人数になりますから、前方と後方で半分ずつに分かれて行くのがいいかと思うのですが」

「とすると、戦闘のできる私とクレストが分かれて、あとはそのどちらかについてもらう、という形がいいでしょうかね」

クレストの提案に、サクルが合わせる。

サクルの声は、いつも事務的で、クレストと比較されると、よりそれが顕著に現れる。

「そうですね。それじゃあ、前方にクレストさんと女性陣、後方にサクルさんと男性陣、ということはどうでしょう?」

レイズが提案する。彼の表情と声が、一番明るく、変化がない。

この状況を楽しんでいるようだが、全く何を考えているのか察せられない。

これはユレイアとカーズライドの共通の認識だった。

「それじゃあ、改めて準備して、ここに集合して出発しましょうか」
クレストの声に、それぞれうなずき、散り散りになった。

部屋に戻る途中も、ユレイアは得体の知れぬ不安感を感じていた。

カーズライドが気づいて、ユレイアの方を頻繁に見るぐらいには、彼女の陰鬱とした感情は、表情に出ていた。

- Separate the sky - 【9】

外出の準備を済ませ、今は皆で先程決めた隊列の通りに森を進んでいた。

部屋に戻った時に、カーズライドがユレイアの名前だけ呼び、黙り込んだまま出かけてしまった。

しかし、カーズライドの表情で、ユレイアもカーズライドに心配をかけているとわかった。

なぜ重い気持ちになるのだろう。気をつけなければ。

「……ところで、どこに行くんですか？」

しばらく歩いて、ユレイアがふと気になって前を歩くレイズに尋ねた。

「ちょっと気になることがありまして、確かめたかったです。どうせなら、同志のユレイアさん達も一緒にいた方がいいかと思いついて、お誘いしてみました」

レイズは相変わらずの笑顔と明るい口調で話す。

人によつては脳天気なように見えるかもしれないが、ユレイアにとつては安心感を与えるものだった。

「そういえば、カーズライド君には話をしたんですけど、聞いていませんか？」

レイズの言葉に、ユレイアは首をかしげた。

その様子を見て、レイズの笑顔は苦いような困ったような、少し複雑な色を含んだ。

「いや、彼が話していないのならいいんです」

「もしかして、カーズライドがあなたに対してあまり態度が良くないのは、それと関係がありますか？」

ユレイアの胸にまた嫌な予感がよぎる。

ユレイアの言葉に、黙って聞いていたクレアはレイズをさりげなく睨んだ。

レイズは、一瞬笑顔をなくし、目を見張ったが、またすぐにいつもの笑顔になった。

ユレイアは、レイズの笑顔はもしかしたら表情を隠す仮面かもしれない、と感じた。

彼の笑顔は固定され、他の表情が読み取れない。

カーライドが、「油断のならないヤツ」と表現していたのが、少しわかった気がした。

ユレイアがじつと見つめると、レイズはまた困ったような笑みを浮かべた。

「どうやら、僕はあまり信用できない人間だと思われているようですね」

「それは日頃の行いのせいね。私も、未だにあんたを信用しきれないもの」

レイズの言葉に、クレアが揶揄するような意地悪な笑顔で言った。

「クレアもひどいな。僕はだいたい思ったことは素直に態度や口に出すだけけどね」

「はいはい」

レイズも、クレアに話をする時は、少し表情が緩む。

こういう所を見ると、レイズに関しては油断ならない人とは思いますが、悪い人ではないと思う。

ユレイアも思わず顔を緩めた。

が、急に前を歩くサクールが歩みを止め、皆の表情が固まる。

「来ました」

皆に緊張が走った。

辺りを見回すと、見覚えのある同じ衣装をまとった女性達が現れた。もう、その腕は植物の茨のようで、生き物のようにうねっていた。

後列にいた三人も走り寄り、武器を持つ者達が、戦闘が苦手なものをかばう形で困う。

化物達も、奇声を発して周りを囲み、詰め寄ってくる。
戦闘開始だ。

戦闘に直接参加できない者達も、扱いやすい小型の武器を持っていく。

「あれ、レイズさんじゃなくて、クレアさんが戦うんですか？」

ユレイアは、クレアの方が大きい武器　槍を持っているのが気になって問う。

「はい。僕は体を動かすことより、頭を使うことの方が得意なので嗜み程度です」

そういうレイズの手には、細長い剣が握られている。
確かに、体力がない者にもふるえそう軽そうな剣だ。

それでも、その体勢はそれなりの心得がありそうだ。

ということは、このメンバーの中で本当に一回も戦闘経験も訓練を受けたこともないのは自分だけなのだ、とユレイアは気づいた。

急に大きな不安が襲ってきて、ナイフを持つ手が震えて、力が抜ける。

そっと、人が近づいてくる気配がした。

ユレイアは驚いて顔をあげる。

大きな背中が見えた。見覚えのある服の色。

カーズライドだった。

「大丈夫だ」

そう言って、自分の手をユレイアの頭に優しく少しだけ置くと、また化物達の攻撃へ向かう。

それだけで、ユレイアの恐怖は波のように消えていった。

不安はまだあるが、震えは止まった。
不思議と、大丈夫な気がしてきた。
そうだ。不安に思う前にやらなければ。自分らしくない。
いつも娼婦館のみんなに言われていたことだ。
別に何ができるわけではないけれど、自分の身ぐらい守らなければ。
皆が戦っている隙に、レイズと二人でじりじりと歩を進める。
それを確認しながら、戦っている者もだんだんと歩を進めていく。
だが、化物側もそれに気づいていたようだ。
戦う者達より少し離れた所にいるユレイアが、気配に気づいた時には、もう目の前に化物がいた。
腕を伸ばした状態で。

「あ……」

気づいた時には、ユレイアの太股を、鋭い刃のような伸びた草が貫いていた。

「ユレイアさん……!!」

思わずその場にうずくまるユレイアに、レイズが気づいて駆け寄る。
カースライドもその声で気づく。

「ユレイア……!!」

急いでユレイアの元へ駆け寄ろうとした。

そこへ、草の影からまた新手が飛び出てきた。

「ライド……!!」

ユレイアが気づいて叫んだが、それでは、もう遅かった。

いくつも伸びた鋭い草が、カースライドの腕や足、腹部、肩など、
体のあちこちに突き刺さる。

ユレイアの目に、その光景はゆっくりと刻み込まれていく。

そして、カースライドが倒れると同時に、草はまた化物の腕におさまった。

カースライドが地面に倒れる音で、ユレイアは我に返る。

「…………ライド…………ライド…………！」

ユレイアは痛む太股も忘れて、血を流しながらライドに駆け寄る。周りの者も慌てて、ユレイアとカースライドをかばう形になる。ユレイアはライドの投げ出された手を取る。

「ライド…………ライド…………」

呼びかけても返事が返ってこない。

握る手も、どんどん冷えていくのをユレイアは感じていた。

この感覚は、娼婦館の時にも経験がある。

病気で次々と死んでいった仲間達。

彼女達は、生きたいと願いながら、結局その腕を力なくおろしていった。

カースライドは、もはや腕をあげることもしていない。

「嫌…………ライド…………いや…………イヤ…………」

ユレイアの目が、だんだんと焦点を失う。

自分の体の感覚も、だんだんと冷えていくのがユレイアには感じられた。

大きく震えだしていく自分の体。

だが、どうしようもない。

カースライドをつかんでいる感覚も次第になくなっていく。

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

ユレイアが大声をあげた同時に、辺りは赤い光で埋め尽くされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4945i/>

Under the Sun

2011年8月28日15時54分発行